

# 小田原史談

第 199 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20  
アオキ画廊内TEL(24)0637

## 中 勘 助 と 小 田 原

### 『漱石の修善寺の大患と『銀の匙』』

木 内 英 実

一、はじめに

中勘助の『銀の匙』が東京朝日新聞紙上に初登場後九十年目に該当した昨年、『銀の匙』は「読者が選んだ私の好きな岩波文庫100(朝日新聞)で夏目漱石の『こころ』『坊っちゃん』に続き第三位に輝いた。作者をモデルとして髣髴させる主人公の多感な幼年時代・少年時代を、精緻な心理描写を中心に描いた文学として、『銀の匙』は不朽の名作の榮譽を勝ち得た。本稿では『銀の匙』が発表されるに当たり、小田原滞在が中勘助の伝記上、重要な意味を持つことに言及したい。

二、『銀の匙』東京朝日新聞連載の背景

そもそも『銀の匙』は、勘助が第一高等学校法文科及び東京帝国大学英文科在籍時、英語・



中 勘助

英文学の指導を受けた夏目漱石の推薦により、二期に渡って東京朝日新聞に連載された二つの小説を基とする。それらは署名「那迦」による、大正二年四月八日から同年六月四日までの五十七回を数えた『銀の匙』とその続編で大正四年四月十七日から同年六月二日まで四十七回に渡った『つむじまがり』を示す。当時の<sup>注1</sup>漱石の書簡及び<sup>注2</sup>勘助の証言から確認すると、勘助の東京朝日新聞連載小説家としての文壇デビューは、偶然的積み重ねによる幸運の賜物としか言

いようがない。

(一) 書簡から伺う漱石の事情  
明治四十五年十二月から『行人』を東京朝日新聞に連載していた漱石は、大正二年三月の胃潰瘍再発に伴い、同年四月七日をもって連載を中断した。その後を承けて勘助『銀の匙』が、続いて与謝野晶子による『明らみへ』へと連載小説は引き継がれていった。かねてより原稿閲読を依頼していた勘助は、野尻湖畔で書き上げた『銀の匙』を明治四十五年九月に漱石へ発送し、十月十五日、一高同級生・野上豊一郎と共に漱石を訪ね賞賛の言葉を得た。大正二年二月二十六日付東京朝日新聞編集者・山本松之助宛書簡中、漱石は勘助の『銀の匙』を絶賛し掲載を推薦した。胃潰瘍再発後の漱石による勘助宛書簡から、漱石の後に予定していた与謝野晶子が懐妊の為の執筆遅滞、それ故、急遽の『銀の匙』連載決定通知と原稿校正や連載予告の準備指示、署名や原稿料の相談など、約一ヶ月の間に慌しく連載準備が整えられていった状況が伺える。漱石にとって勘助の『銀の匙』は、『行人』連載中断の窮地を救った作品であった。

(二) 勘助の家庭内事情

『銀の匙』執筆当時の勘助は、脳溢血発作の後遺症として失語

症と身体麻痺を患う兄・金一との確執の只中にいた。明治十八年生まれ勘助より十四歳年長の金一は、東京帝国大学医科青山内科を卒業後、子爵野村靖の娘・末子と結婚し、ドイツに単身留学、明治三十八年福岡医科大学(筆者注:後に九州帝国大学医科)の教授となったエリートであった。舅・野村靖没後、初七日法要の為上京した<sup>注3</sup>明治四十二年一月三十日病に倒れ、生涯療養生活を送ることとなった。明治維新後に今尾藩士から実業家に転身した父・勘弥は当時すでに亡く、兄・金一が家長として東京市小石川区小日向水道町にあった中家の家屋敷及び貸家など不動産管理と家事運営に務めていた。

「功名利達を人生唯一の目的とする明治初年人の典型」(『中勘助全集第八巻』)と勘助が評する兄と繊細な神経を備え文学を志す弟では、性格が合うはずはなく、発病前から「陰に陽に人びとの前に私を恥かしめ貶しめることに骨を折った」(同前)と兄から迫害されていた状況を兄逝去後、勘助は明かした。勘助は四十二年七月の東京帝国大学卒業を目前として兄が再起不能となった為、卒業後は唯一の弟である勘助が母と兄夫婦の経済生活の基となる財産管理を担う

必要があった。しかし「従来も  
のの数に入らなかつた」(『全集  
第十一卷』)弟を周囲の者が「家の  
柱に見立てるやうになつた」こ  
とに対する憤懣から、病兄の勘  
助への憎悪は更に深まつた。生  
家に居た堪れず仮寓転居を繰り返  
した勘助を家に戻す為の工作  
が嫂を中心に行われた末、四十  
五年晩春から初夏にかけて、兄  
弟の和解及び家の後見について  
の話し合いが、勘助・九州時代の  
の兄の同僚・嫂・親戚間で持た  
れた。父の遺産など「兄の健康  
なぶんから私が収入の大部分  
を兄に提供していた」という勘  
助の主張と「学校を出たにもか  
かはらず何もせずにあるのは不  
都合だから月づきにながしか  
の収入を得ろ」という兄の主張  
は対立したが、勘助が折れて兄  
の同僚の「勧告に従ひ執筆によ  
つて若干の収入を得ることにし  
た」という。つまり、『銀の匙』  
執筆は、第三者を交えて決着し  
た兄弟の和解の条件を果たすこ  
とに直接的動機があった。漱石  
の代役としての小説新聞連載  
は、勘助にとつて願つてもいな  
い好機であつたのだ。

三、漱石と勘助との交流をもた  
らした小田原

(一) 漱石の修善寺の大患と勘  
助

前述したように漱石と勘助と

の交流は、そもそも学校におけ  
る師弟関係を元とする。勘助の  
一高・帝大時代の友人である安  
倍能成・小宮豊隆・野上豊一郎  
らは漱石の文壇デビュー後、漱  
石宅に足繁く通ひ文学サロン木  
曜会の主要メンバーとして文学  
上の師弟関係を漱石と結んでい  
く。彼らは東京朝日新聞の文芸  
欄を舞台に明治四十二年十一  
月から四十四年十月末まで文学評  
論で活躍した。一方、同時期の  
勘助は病がちの不安定な生活を  
送つていた。漱石は勘助の置か  
れた状況に対して、四十二年  
「<sup>『日記及び断片』</sup>の中で「中  
ノ兄ガ急ニ卒倒シテ馬鹿ニナツ  
テ仕舞ツタト云フ。中ノ兄ハ福  
岡醫科大學ノ教授デアアル。一刻  
ニシテ教授所デハナイ白癡ト化  
シテ仕舞ツタ」と関心を示して  
いる。

漱石と勘助との接近の端緒  
は、勘助小田原滞在中の明治四  
十三年八月末にあつた。長与胃  
腸病院退院後、胃潰瘍の保養の  
為、修善寺温泉を訪れていた漱



夏目漱石

石は八月二十二日大量吐血し人  
事不省に陥つた。

勘助の証言によると「電報で  
修善寺に御見舞を出した」後、  
「先生がよほどいいといふこと  
を知つて、やほではあるが美し  
く彩色した蝶形の麦藁細工の籠  
にいろんな色紙や千代紙でこし  
らへた折物ちりちりなどを入れ  
て送つた。小宮の代筆かなにか  
で手紙がきた。鷲、ふくら雀  
などと目録を読みながら枕もと  
へ列べるところかなにか書いて  
あつた。先生はそれを見て「こ  
のうちに中のこしらえたのは一  
つ二つしかないんだらう」とい  
つたといふ。」(『全集第四卷』)と  
漱石の枕辺にいた小宮豊隆らと  
連絡を取りながら大患の見舞い  
をしたことを記す。

勘助の見舞いに対する漱石の  
返礼を始め、両者の交流の様子  
は「先生の手紙と『銀の匙』前  
後」(『全集第十一卷』)という勘助  
の随筆に詳しい。明治四十四年  
四月陸軍衛戍病院入院中の勘助  
に対し、更には四十五年七月に  
福岡市に嫁いだ病妹の看病に当  
たる勘助に対して、漱石は見舞  
状を出している。『銀の匙』原  
稿閲読の約束は以上のような病  
気見舞いを中心とした交際の  
中、交わされていった。つまり  
小田原から勘助が修善寺の漱石  
に送つた見舞いこそ『銀の匙』

が世に出るきっかけとなつたの  
である。

(二) 勘助の小田原滞在理由

前述した通り病兄との確執の  
結果、陸軍入隊を皮切りに仮寓  
転居を繰り返す勘助の十三年間  
の逍遙は、明治四十二年の小田  
原滞在を端緒に始まつた。大学  
を卒業した年の秋から翌年の春  
へかけて半年の間病床にゐたあ  
げく夏になつて病後の保養の為  
に小田原にある親戚の別荘へ幾  
月か厄介になつてゐた。」とは小  
田原滞在の表面上の理由であ  
り、「兄は面白くないことがある  
と庭にゐる犬に綱をつけてきて  
寢床の上へあがらせたり枕を足  
蹴にしたりする。(中略)そんな  
風で到底丈夫になるまで私を家  
におけないと見てとつた姉はま  
だ随分弱つてる私に手紙をもた  
して小田原にあるさとの別荘へ  
ゆかせた。」と、その陰に病兄  
による勘助への虐待を見るに堪  
えなかつた嫂の計らいがあつた  
ことに言及する。

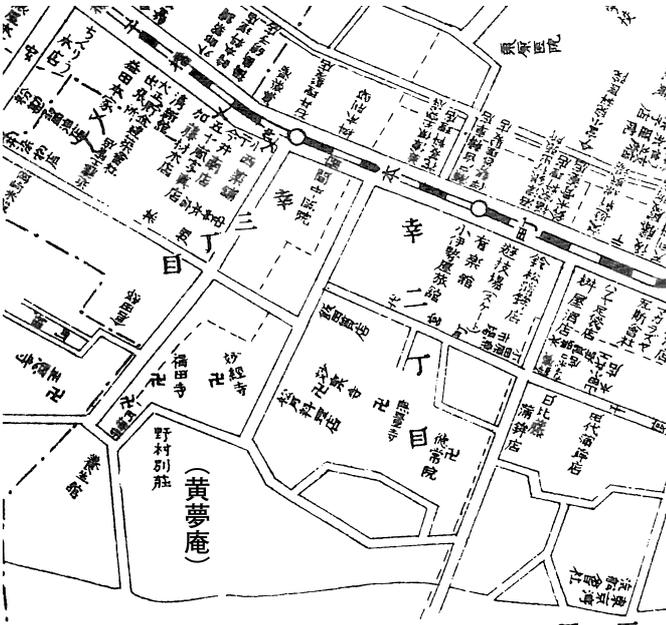
勘助にとつて嫂の実家別荘は  
友人と一夏を過ごしたこともあ  
る青春の思い出の地であつた。  
一高時代の親友で大阪在住の山  
田又吉を差出人とする相州小田  
原・中勘助宛明治三十八年七月  
三十日から八月七日までの数通  
の書簡(『全集第十七卷』)から、  
勘助が嫂・勘助の一高における

友人で東京新橋の江木写真店主・江木定男と共に小田原に滞在していたことがわかる。また四十二年九月八日付山田又吉から相州中勘助宛書簡中「黄夢庵の方々によろしく申上げてくれ」との表現から、当時、小田原の野村家別荘・黄夢庵に勘助が滞在していたことが確認された。

(三) 黄夢庵について

黄夢庵は、野村靖によって明治二十一年、小田原町幸三丁目五百四十八番に建てられた野村家別荘の別称であり、靖は自ら黄夢庵主と号した。黄夢庵という庵名は、黄梁一炊の夢(邯鄲の夢)の

故事に因んで富貴・功名のはかなさのたとえから、また生涯十一一人(内三名は夭折)の子どもを産んだ花子夫人が小田原で頻繁に出産をしたことから命名さ



大正2年(1913)12月 小田原案内図

れたという。

野村靖は、天保十三年八月六日、長州に生まれ、実兄入江九一と共に松下村塾で吉田松陰の指導を受けた。安政六年十七歳の年には松陰の伏見要駕策の為、脱藩し上京したが失敗、萩にて兄と共に囚獄された。松陰が安政の大獄で、入江九一が禁門の変で世を去った後も尊王攘夷運動に邁進し、明治維新後は、中央政府に出仕し岩倉遣欧使節団に加わった。帰国後、外務省を経て明治十一年七月神奈川県、十四年十一月駅通総官、二十年五月授子爵、二十七年十月

第二次伊藤内閣内務大臣、二十九年九月第二次松方内閣通信大臣、四十年内親王御養育掛長を歴任し、四十二年一月二十四日鎌倉御用邸で急逝した。晩年は、松陰の著述出版を始め徳富蘇峰の『吉田松陰』改訂に資料を提供するなど「弘く青年ノ購ヒ得ル様ニイタシ度」と青少年への松陰の思想紹介に努めた。



野村 靖

勘助の随筆からは、「ある時何かの事の序に姉の父が、若い者たちに雷のやうに怖がられてたあの父が人一倍大きな目に涙をためて私に、姉さんを頼む」といった。(中略)怒ると雷みたいに怖かつたが、またひどく涙もろい父でもあつた。姉は父の秘蔵つ子だつたらしい。」(全集第七巻)と野村靖の子煩悩な一面が伺える。

小田原での靖は、近隣の人々とは元より松下村塾で同胞だった萩出身の元老たちとの交流を深めている。その様子は明治二十三年八月から三ヶ月余り襖画を描くため黄夢庵に滞在した画

一九九号(平成十六年十月号)  
目次

中勘助と小田原 漱石の修善寺の大患いと 『銀の匙』 木内英実……………	1
小田原の郷土史再発見 板橋村 字水神ヶ森 石井啓文……………	5
鮎に生き 鯉に生き — 漁業小僧の奮闘記 — 井上高久……………	8
小田原の桜 上田謙二……………	11
折にふれて(二) 高田掬泉……………	13
明治時代、小田原の商家(2) 中村静夫……………	16
小田原叢談(四十七) 石井富之助……………	19
銀杏散る 銀持芳枝……………	21
酒匂史談(18) 川瀬速雄……………	22
中村原郷の思い出(14) 遠藤治郎……………	24
片岡日記(31) 片岡永左衛門……………	26
新刊紹介……………	30
会からのお知らせ……………	31
落穂集……………	15

工による「<sup>注5</sup>八海東上日記」に詳しいが、黄夢庵隣に別荘滄浪閣を構えた伊藤博文を始めとし、長州藩関係者が足繁く小田原を訪れていた様子が、そこから伺える。また、<sup>注6</sup>明治三十五年九月に起きた小田原大海嘯の新聞記事には、漁師の通報により家財道具を近隣の人々の協力で運び出したところ別荘は波に攫われ、庵にあった閻魔様の木像一体が海に流されたものの子爵は早雲寺におり無事だった事から、閻魔様が子爵の身代わりになったとの地域での伝承話「野村子爵の身代り閻魔」が記録されている。

勘助が嫂の勧めにより滞在した明治四十三年当時は、黄夢庵には花子未亡人が隠居しており、小田原少女会・私立小田原第一幼稚園・小田原敬愛婦人会の設立に尽力し、会長・理事長職に当たるなど小田原の社会教育事業に余生を傾けていたことが花子未亡人の<sup>注7</sup>訃報記事から明らかになった。

(四)『網引き』における勘助の小田原での体験

明治四十三年夏の黄夢庵滞在中の思い出は勘助の手により随筆『網引き』にまとめられ、昭和十二年五月『思想』に発表された。(『全集第四巻』)「健康を回復して病氣前より幾層倍か丈夫

にさへなつた」のは「わけ隔てのない母(筆者注・嫂母)の心からの親切」のお陰と作品冒頭に物故者である花子未亡人への謝辞が記される。「なほほほましくしてすがたい残りの香りを感じさせる」思ひ出として、当地で交流を持った野村家の人々を、また作品執筆時には既に他人の手に渡っていた黄夢庵を懐かしむ思いに満ちている。

談話室・遊戯室を兼ねた茶の間のある母屋と廊下続きで小高いところに建てられた海が見晴らせる高間という一棟、そして新座敷という別棟によって構成された建物の描写は、養生館を始め西湘の浜辺で営業していたリゾート旅館の建築様式と重なる。嫂母と嫂の実妹・初子さん(柳田国男実弟・松岡静雄夫人)とその子ども、親戚の子どもたちとその家庭教師と勘助との交流の様子が描かれるが、中心となるのは孫の誕生祝いと花子未亡人が御幸の浜で子どもたちに地引網を引かせる場面と、内気な少年・春ちゃんと勘助の密やかな交歓である。懇意の近隣に案内を出し多くの子ども達が集まる中、浜に店を出す甘酒屋までも手伝って皆で網を引き、小鰯・ひらめ・をこぜ・矢がら・鮫の子・鯛などの獲物をめいめいにお土産に分けた目出度い網引き

の陰には、鮫やひらめなどのお景物をあらかじめ網の中に入れておいた花子未亡人の心遣いがあったという微笑ましい落ちがある。また、楽しみにしていた活動写真鑑賞が叶わなかった時の子どもの悲しみや、初島と真鶴の間を通ってくる小さな汽船を待たため浜に設えた葭簾<sup>よしずり</sup>の待合所で、また波打ち際の艇で勘助との別れを惜しむ春ちゃんの切ない童心も描かれた。

#### 四、終わりに

勘助が肉体及び精神的に大変辛い時期を経て小田原の黄夢庵で花子未亡人の厚意のもと心身を充分に癒したことは、先述した随筆『網引き』から伺える。

「夏目先生と私別稿 漱石先生と私」(『全集第四巻』)には「夜なかに地曳網の曳手を呼び集める呼手の法螺貝のやうな声に呼びさまされて、先生はどうかしらと思ひながら松山を越えて海岸に降りてみた。月がかうかうと照つてゐた。冷い浜に幾人かの曳手が時をおいてえんえんと小さな声をかけながら、少しはなれて見てゐる私の眼には只影法師がゆれてゐるやうに網を曳きあげた。折角ひきあげた網には魚が一匹もゐなかつた。一人二人失望の声をあげたばかりで物をいふものもない彼らをあつと、私は伊豆のはうの山を見なが

がらまた松山を越えて家へ帰つた。」と、勘助は漱石を氣遣う心を夜明け前の御幸の浜辺の情景に重ねて表現した。肉親以外の他人の親切を受け心身の健康を取り戻したばかりの勘助だからこそ、重篤な状態で伊豆に滞在中の漱石の身の上に同情が深かった。不世出の作『銀の匙』東京朝日新聞連載、延いては『銀の匙』が世に出る礎となった漱石と勘助との人間関係構築には、勘助の小田原滞在期が重要な意味を持つのだ。

<sup>注1</sup> 『漱石全集第三十巻』(昭五五年二月 岩波書店)

<sup>注2</sup> 『中勘助全集第十一巻』(平二二年七月 岩波書店)

<sup>注3</sup> 国立国会図書館憲政資料室所蔵「野村靖文書」より

<sup>注4</sup> 『漱石全集第二十五巻』(昭五四年一月 岩波書店)

<sup>注5</sup> 『八海東上日記抄』(工藤次郎編著 平一四年二月 海鳥社) に抄録

<sup>注6</sup> 明治三十五年十月二日 東京朝日新聞

<sup>注7</sup> 注3に同じ

なお、野村靖略歴については、『追懐録(復刻版)』(野村靖著)及び『松下村塾の明治維新』(海原徹著)を参照した。

筆者紹介

木内英実さんは日本女子大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程前期を修了され、現在小田原女子短期大学幼児教育科専任講師として教鞭をとっておられます。(青木良二)

# 小田原の郷土史再発見

## 板橋村字水神ヶ森

石井 啓文 ひろ ふみ

はじめに

「早川上水」について調べていたとき、板橋在住の目下部庄一氏より「現在の『小田原市明細地図』に、早川の河川敷内に『水神ノ森』が記されている。昔から早川の水の清冽さを象徴する地名が残されています」と聞かされました。

私は、居神社社付近が「井神の森」と称されていた(伝肇寺文書)ことと関連する言葉ではないか。河川敷内に地名が記されているだろうか? と、訝りながらも当史談会の史跡めぐりの資料等に収載し、ご存知の方に教えていただければと思っていました。

そうしたところ、『皇国地誌残稿(以下『地誌』と略す)』板橋村「小田原用水渠」の説明に「字水神ヶ森」とあり、地名であることを教えられます。

一つ知れると面白いもので、明治期の地租改正で作成された『板橋村大絵図(以下『大絵図』と略す)』に記されており、何のことはない『角川日本地名辞典・神奈川県』の小字一覧にも明記

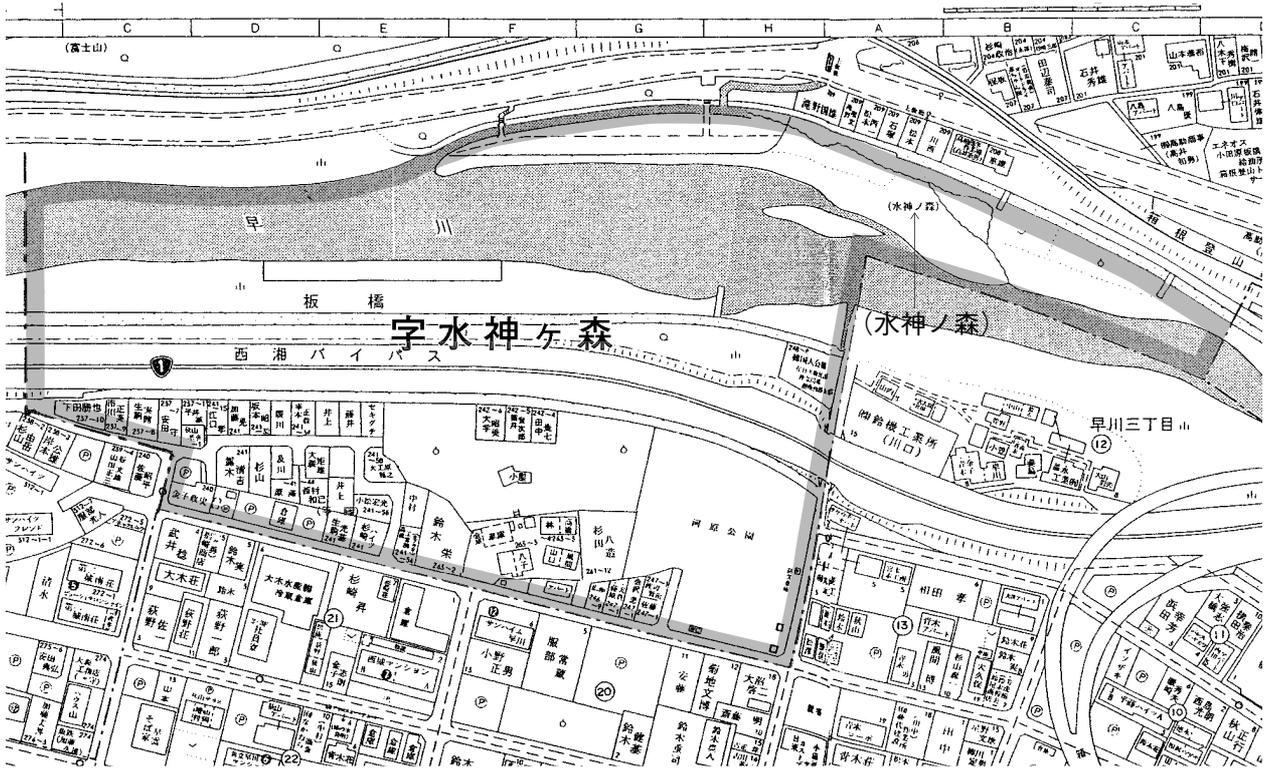
されています。『地名辞典』や『地誌』など何故調べなかったのか。「河川敷内に地名が記されているとは思えない」と、先入観を持ってしまったからで、目下部氏には誠に申し訳なく恥じ入るばかりであります。

なお、『地誌』からも板橋村では一貫して「小田原用水」と知れますが、『新編相模国風土記稿』(以下『風土記』と略す)の「早川上水」で論述します。

### 一、字水神ヶ森

『大絵図』によると、現上板橋の早川上水水門から見た対岸(右岸)の早川沿いが河川敷を含めて「字水神ヶ森」である。

地番では二一〇から二四九番地に相当するが、これは江戸時代の検地地番と同じである。ただ、現状は二六〇番代が含まれており、多少の変動が窺える。この地域は現在も板橋であるという。では何故、こうした珍しい地名が付いたのだろうか? あるいは、この字水神ヶ森地域に「水神」が祀られていたのではないだろうか? 居神社に水



小田原市明細地図にみる「字水神ヶ森」

神が祀られ、「井神の森」と記された文書のことには既述した。しかし、この「字水神ヶ森」地域に、それと覚しき神社や寺は見当たらない。

『地誌』は、溝漉(堰や溝)の項で、次のように記している。

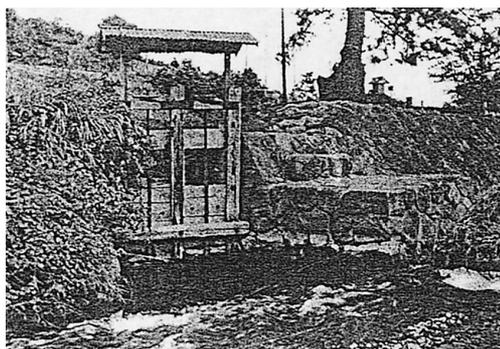
湯本堰 子四度本郡水ノ尾村ヨリ洞穴ニテ字狩俣ニ来リ中郡ヲ東南ヘ十七町三十間辰八度字大窪ヨリ小田原駅十字町ヘ流ル此間字入谷津ノ水田壱町三反五畝六歩字大谷津ノ水田貳町六反四畝十貳歩字古大門ノ水田壱町六反壱畝十五歩等ノ用水ニ供ス幅三尺或ハ貳尺小田原用水渠 午廿度字水神ヶ森字中瀬ノ間ニ水門(高一丈二尺幅八尺)ヲ設ケテ早川ヲ堰キ上ゲ南部ヲ東南ヘ七町廿五間辰六度字大窪ヨリ本郡小田原駅十字町ヘ赴キ彼駅内ノ飲用水トナレリ幅六尺或ハ七尺中瀬堰 午八度字中瀬ニテ用水堰ヲ分チ南部ヲ東南ヘ六百間辰廿六度字下河原ヨリ早川ヘ入ル此間字中瀬ノ水田貳町六反七畝廿五歩字藪田ノ水田貳町八反七畝十九歩字畑田ノ水田貳町九反四畝廿七歩字福井嶋ノ水田貳町八反七畝十九歩字宮免ノ水田貳町四反壱畝五歩字下河原ノ水田貳町五反壱畝十壱歩等ノ用水ニ供ス幅六

尺或ハ三尺

以上の記述から、「早川上水水門」が字水神ヶ森と字中瀬の間にあると知れる。

また、板橋村の水田は湯本堰と中瀬堰の用水を使い、早川上水は灌漑には用いられず、小田原府内の飲用水にのみ使用されていたことがより判然とする。

そして、ふと思ひ出したのが、『東海道分間延絵図(以下『延絵図』と略す)』である。確か、早川の分水点辺りに鳥居らしきものが描かれていた。念のため、その部分を拡大コピーして見ると、鳥居と見て間違いなさそうである。ここに水神が祀られていたのではなからうか。とすれば、現代の『明細地図』の河川敷内に「水神ノ森」が残されて



戦前の早川上水水門(「板橋周辺の史跡と自然」より)

いるのも納得できる。早速、図書館で東京美術出版本を確認すると間違いなく鳥居である。カラー印刷で朱塗りの鳥居が描かれている。解説図には分水点に「門樋」そして、鳥居は「水神」と銘記されている。

## 二、中瀬堰分水

『板橋村大絵図』から、早川上水と中瀬堰の分水が読み取れる。それは、最近「小田原用水(早川上水) 取入口」と改められた説明板のある所である。

現在、小田原市河川課では、「早川上水」を板橋第一排水路、「中瀬堰」を板橋第二排水路と称している。

私は最初、明治二十一年(一八八八)の分水事件の時にこの中瀬堰が設けられたのではないかと推察した。だが、『大絵図』は地租改正(同九年)の際に作成したとあり、『地誌』も明治七年(一八六四)頃調査に着手し、同十八年(一八八五)に終了したと言われており、少なくとも同九年(一八七六)の時点では存在していたことになる。しかし、『延絵図』に描かれておらず、『風土記』にも中瀬堰の記載がない。従って、創設時期は判明しない。

『地誌』の記述で、字中瀬・字藪田・字畑田・字福井嶋・字宮免・字下河原の灌漑用水とし

て用いられていることが判明するから、江戸時代には存在していたと思われる。

また、『大絵図』には、早川上水・中瀬堰ともに幅六尺とあり、更に早川堤添いに三尺の水路も記されている。これが『地誌』の「幅六尺或ハ三尺」なのであろう。分水事件は、明治二十一年十二月に「水門下適当ノ場所ニ於テ分水口壱ヶ所ヲ創設シ引水ノ全量ヲ十分シ其五分五厘ヲ小田原全駅ノ専用トシ四分五厘ヲ板橋全村ノ専用ト定ムル事(明治小田原町誌)と交換文書を交わし、翌二十二年六月、「工事中なりし大窪村板橋飲用水分水口落成す(同)」とある。中瀬分水が事件以前に創設されていたのならば、他に設けられた分水口は何処であろうか。

また、「湯本堰」も字入谷津・字大谷津・字古大門等の用水に用いたとある。現在ではその面影は全く窺えないが、板橋村には二十二町歩近い水田があった。それらの用水は、湯本堰と中瀬堰によるもので、早川上水は灌漑には全く使用されていないことが判然とする。

## 三、水神を祀る

「水神」について『国史大辞典』は、次のように記している。

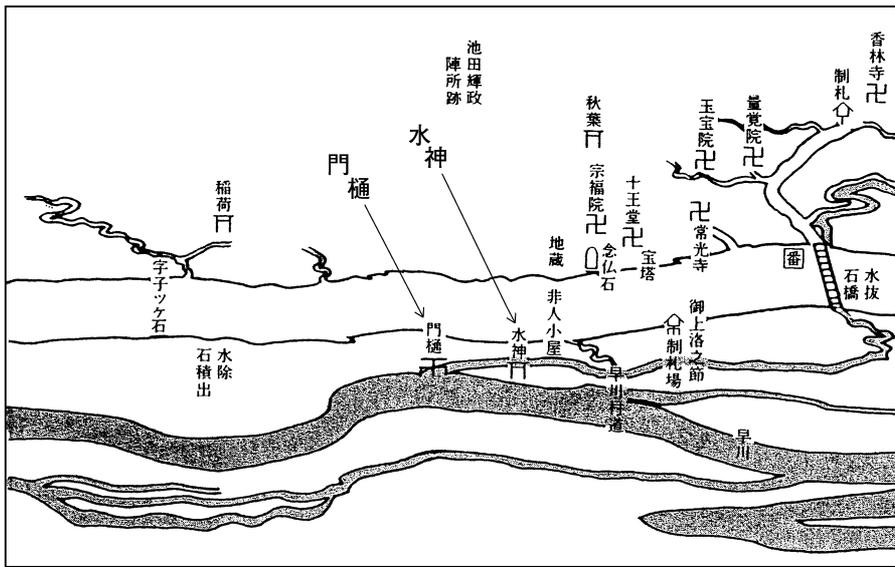
水神 水の神の総称。

井戸神・河の神などを含み、その神格は多岐にわたっている。『日本書紀』仁徳天皇六十七年条などに見えるミズチは、水の霊であつたらしいが、後世には蛇や竜の姿を持つとされるようになった。飲料水を井戸・川・泉に求める所では、その水汲み場が水神の祭場とされ、正月または六月・十二月に御幣などを立てて水神祭をした。井戸神に対しては井戸浚えの際にも米・酒などの供え物をする。稲作には灌漑用水の確保が必要なので、水神は豊作をもたらす神とされ、田の神信仰と関連するところが多い(中略)。一般に水神への供え物には胡瓜などの畑作物が多く、水神祭がすままでこれを食べない禁忌も見られる。

こうして早川の取水地点と、小田原府内の飲料水に用いる出発点である居神神社に水神が祀られた。水に対する畏敬の念と水の恩恵に感謝し、その施設の安全をも願う、宗教とは異なつた信仰心の表れと考える。

かつて、一般庶民の生活では一日に必要な水を汲んで貯えることがその日一番の仕事であつたという。元日の朝、「若水を

汲む」という行事も水神を祀ることと共通した信仰心であり水文化と考える。そして、隣の人が汚れ物を流さないという信頼関係が小田原町民と板橋村民に存在したのであろう。江戸時代の史料に早川上水に関するトラブルは見られない。



東海道分間延絵図(文化4年(1807))解説図(東京美術刊)より

では、取水地点の水神は何処に祀られていたのだろうか。『延絵図』に、門樋(水門)の近くに水神が描かれているが、水神が河川敷内に祀られているとは考えられないことから、現在の市川文次郎頌徳碑の辺りに水神が祀られ、そこを「水神ヶ森」と称したのではないだろうか。

とすると、「字水神ヶ森」地域からは外れてしまふ。あるいは、早川右岸が「水神ヶ森」を見渡せる地域であることから、「字水神ヶ森」と名付けられたと考えられないだろうか。

おわりに 明治以後、急速な井戸の普及により、早川上水は雑用水路と化し、人々の関心も薄れ、水神があつたことさえも忘れ去られている現実を残念に思います。この「早川上

水」について、二十二年前の昭和五十七年(一九三三)発行の『板橋周辺の史跡と自然』と題した板橋の郷土史(仮称)編集資料(二)で、田代道弥氏は、次のように述べています。

「現在、小田原用水は、その史跡としての重要性を市行政もままでも知らず、住民も無関心のまま、ついにドブ川に近い哀れな姿になってしまった。市は水路をズタズタにした後、今度は城の堀へ入れると言つて、巨額の費用をかけて壊した部分を改修したところである。前後二回の工事を通じて、市には歴史的なこの用水に対する愛情などまるでなかった。そして、それは市行政の問題だけでなく、住民もまた、この用水の恩恵を忘れたような振りをしているところに大きな原因があろう」

これも、今日では過ぎ去つてしまつた歴史の一頁になりつつあるのでしよう。しかし、歴史は現在も生きています。過去を見つめることにより、それを現代に活かす、未来へ繋げてゆくことが歴史を勉強する者の勤めだと信じます。歴史を活かすのに遅いということはないと考え、早川上水水門周辺を「早川上水歴史広場」として整備されるよう願っております。

(おわり)

## 鮎に生き 鯉に生き

## — 漁業小僧の奮斗記 —

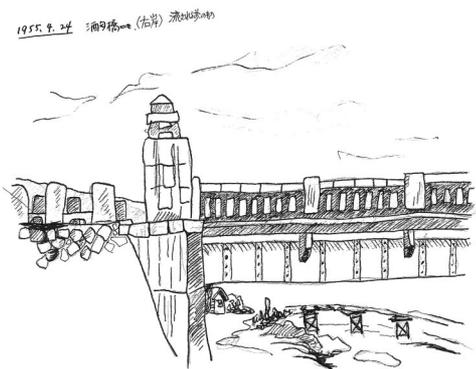
井上高久

昭和二十一年の小学校六年生から、二十五年に市立二中を卒業するまで、四年ほどは、家では勉強しなかった。

夏は野球少年、春は漁業小僧の生活だった。春休みを待ちきれずに、酒匂川を飯泉あたりまで、ボクががき大将で魚とりに日参した。

新玉小学校の正門前から、新玉新道へ抜ける道がある。その道の正門近くに、ボクたち仲間、住んでいた。

いま、川を溯りながら、追憶の糸をたぐり寄せる——



国道一号線。酒匂橋の下流では、一度だけ漁をした。ボラの子のイナ。体長六、七センチ。浅場に、群をなして泳いでいるとの情報をえた。行つてみた。四メートルほどの川幅で、瀬が、下流でゆるやかに変わっている流れ。十メートルもないその流れは、小魚のなぶらで波立っていた。大将は、仲間捕かく作戦を指示した。上からの流れが二股になっている、瀬の頭のところを石を並べた。大きい石を流れる速いところに配し、小石をその間に入れた。ただひたすら、石を運んでは並べる。ようやく、流れをせき止められた。水が減った流れのくぼみには、イナがピチピチ。一時間ほどの重労働の対価は、バケツとびくにいっぱい、イナだった。後でイナは、そのまま煮て食べた。美味だったが、腹の部分のヘソの塊様のものには閉口した。

朝早くから昼までの重労働。空腹は極限。ポケットの中を探り、金を出し合って買ったうず

まきパン。五円だったろうか。うずまきパンの味は、今も忘れられず、口の中に甘い。

酒匂川の左岸。JR線鉄橋の下あたりは、川エビの宝庫だった。蛇かごが、土手の傾斜に沿って、二十メートル、三十メートルと並べられていた。先端は川の中に没していた。

蛇かごは護岸用。数ミリの太さの針金を、例えば四メートル前後の長さ、太った人の胴ぐらゐに、粗く筒状に編む。蛇のよゝに長い網の中に、小石をびつしり詰めたものである。

石と石の間には、川エビをはじめ、多くの魚が棲んでいた。子供の膝ぐらゐの、ゆつたりとした流れだった。

箱メガネで、水中をのぞく。四角い木箱の底にはめ込んだ、ガラスを通して、目の前に別世界がある。水中の景色だけが迫る。大きな鮎の姿を捉えたとき、ウナギのパクパクする口を見つけたとき、ぞくぞくと身振いがおそう。

川エビの長いひげが、石の間に動いている。テグスを編んだエビ専用の網や、もりで捕まえる。一度、三十匹ばかり捕って、夕食のおかずにして、母との約束を果たした。

この「漁場」へはずつと上流の橋を渡らないと行けない。酒

匂川の本流を渡るの、無理だった。ほかには——鉄橋渡りしかなかった。四、五十分は節約できる。

いざ渡ってみて、びっくりした。列車が通過する。渡っている板がはげしく揺れる。板がまるで、振り落とそうとする、意志をもっているようなのだ。

何箇所か、待避所が設けられていた。が、運悪く、待避所と待避所の間あたりで列車に遭遇したら、最悪だった。

板の上で、脇の手すりを、必死に握っていた。目を閉じて……

こりずに、鉄橋渡りをくり返したが、事故は起きなかった。

ある帰り道。鉄橋を渡ってそのまま、線路を歩いてきた。線路の脇に男がいた。

「線路を歩くと、危ないよ」  
通り越してしばらくすると、背後から列車が来た。

線路から下りて、後を見ると、男が線路の上に横たわっていた。びっくり仰天した。次に起こることが頭の中に浮かび、こわくなって、一目散にその場から逃げた。

仲間の一人は、下駄が片方、脱げてしまった。それでも懸命に走った。それを翌日とりに戻った。

列車のトイレは、使用後に栓

をあけて、線路にたれ流ししていた。歩くと、便や紙などが、延々と東京に向かって続いていた。

理論的には、この一本の線は、日本中を結んでいたことになる。

土手を歩いての往き帰りは、気楽なもので、だれかが、「今週の明星……」

「岡 晴夫」とか、「岡 晴夫」とか、

「田端義夫」と応えて、「第一位！」

といいながら、土手を駆けた。飯泉橋は、車一台がやっと通れる幅だった。橋の入口には、

『先入車優先』と書いてあった。車、自転車、人が同時に渡った。

ある時、自転車の男が車をよけそこねた。自転車は橋の柵にひっかかり、男だけが下に落ちた。

雨で少し増水していたのが幸いした。流れの中に落ちた男は、立ち上がって無事だった。

橋を渡って、酒匂川の左岸。鉄橋下の「漁場」から溯った、このあたりは、朝鮮小屋から流れてきた川が、淀みになっていた。

洪水でやられたコンクリートが、飛込台で、かっこうの泳ぎ場だった。ここで、魚を捕った記憶はない。

この近くの分流の、膝ぐらいの瀬で、あんま釣りをやった。一メートルちよつとの竿に、それより少し長い、先端に鉤だけをつけたテグスを結ぶ。餌は川虫とかサシ。川下に向かい、竿を水面に浸けて下流、上流と上下運動をする。毎秒の周期。腰をかがめ、竿を持つ姿があんまに似ていた。



飯泉河原の明神と橋

あんま釣りは、また笛の音をとらえて、ピーポー釣りともいった。浮き釣りより、魚の引きが直接、強く手に伝わってきた。オイカワが面白いように釣れた。

飯泉橋を左岸に渡り終えると、道路は直角に曲がって、土手の上を上流に向かう。間もなく、土手から別れて右

斜めに下り、椎野食品の前を、飯泉観音の門前へと続く。

ここも道幅はせまく、先入車優先だった。そして今も……。土手を右斜めに下る道の、反対側に、川原へ下る道があった。

下ってすぐ、酒匂川の支流の小川。架かっていた橋は、ジャリトラが通れる、頑丈な木橋だった。

木橋の少し上に、二、三軒の小屋が見える。そのあたりを朝鮮小屋と呼んでいた。

飯泉観音と、直線距離でいくらかはなれていない。両者の間には、大小何本もの木が茂っていた。

木々のつくる陰が水面を覆い、朝鮮小屋の淵には、とてつもない大物が、棲んでいるように思わせた。

事実、岩の上から、箱メガネで水中をのぞいた時、五十センチは下らない、ライギョの群を見つけた。飯泉界隈では、ほかの場所で、ライギョを見たことはなかった。

この淵には、三本の川が流れ込んでいた。子供の背丈の二倍は、優にある深さだった。

フナをはじめコイ、ナマズ、ドジョウ、オイカワ、いろんな種類が棲息していた。

ブツテや、網で捕れる深さではなかったので、ここではもつ

ばら釣り、時々泳いだ。釣りは間怠つこしかった。川に入って、草むらや、藻の中から追出した魚を、ブツテで捕る方が、よほど面白かった。

仲間うちでは、役割分担が明確だった。

ブツテで捕るのが大将で、魚を追い出すのがその次。ビク持ち、下駄持ちと続き、雑用係の年少者は、川に入れない。

淵に流れ込む、三本の川の一本。

酒匂川左岸の土手の、すぐ外側を流れる。富水、栢山の湧水を多く含んでいて、ほかの川より冷たく、川底は砂地で、とて

もきれいな流れだった。この清流につながる、せまい灌漑用の水路も含め、鮎が群れをなして泳いでいた。

上流に、苛性ソーダを投げ入れ、鮎を一網打盡(?)にしたことがあった。鮎は繊細である。

朝鮮小屋の合流点までの、鮎を捕りつくした。急いで家に持ち帰り、山分け。天ぷらや焼いて食した。

川の管理が整っていないかった、今は昔の物語である。

苛性ソーダや、カーバイドを流して捕る方法のほかに、電気による方法があった。

脱穀機に使う、畦道の上を通る電線。電線は、長年風雨にさ

され、電線は、長年風雨にさ

らされ、ところどころ裸になっていた。そこに、先端をかぎ型に曲げて裸にした、導線をひっかけ、水の中に他の端を入れ、電気ショックで、浮き上がってきた魚をすくう。

危険で、毎年誤って、少年が死んだとの新聞記事を目にした。

この清流をはじめ、川へは素足で入った。足を使って、岸への草むらから魚を追い出す。ずい分、大胆なことをしたものだ。ビンヤカンは、捨てられていなかったので、事故はなかった。まれに、夜、寝床の中で足のうちらがうずき、負傷に気づいた。古い、さびたトタン板が原因のことが、多かった。

朝鮮小屋から四、五百メートル上流。

酒匂川左岸から、二百メートルぐらい。酒匂川と平行に流れている、ごく浅い、数メートル幅の川があった。川に沿って、低い、先端の断面が三角形に近い、土手があった。一帯を三角堤防と呼んでいた。

この川には、ミヤコタナゴが、湧いてくるようにたくさんいた。浅いので、漁法は手づかみ。

大人の頭ほどの石を、両の手で左右から攻める。巧くやると、いっぺんに数匹のタナゴが、手

の平に入った。数センチから、それをちよつと超える体長。オスは、腹部が赤や青に彩られていて、とてもきれいだった。観賞魚としても、通用しそうだつた。

タナゴはフナのような体形で、骨が多く、おいしくなかった。フナも骨が多く、おいしくない。

正月に、フナの昆布巻をつくる近所のおばちゃんに、もつぱらあげていた。

このあたりまで上ってくるのと、人家はまばらだった。

三角堤防に立つ。

酒匂川の左岸までの間に、見渡すかぎり人家はない。後を向けば、飯泉観音を巻くように、北に走っている道路が、遠くにあった。時間の間隔を忘れかけたころ、砂ぼこりを上げて、次のバスがガタゴト、走って行く。堤防から道路までは、稲田だけの、単調な景色だった。

ある年の夏、栢山が母の実家の仲間から、耳よりの情報が入ってきた。

「七月二十一日の『干し』には、魚がたくさん捕れる」

「干し」は、七月二十一日の一番に始まって、二番、三番と続く。

田の取水を止めて、干す。大きな川からの、取水を止めるから、灌漑用の水路も干上がる。

田んぼや用水路にいる魚は、わずかに水の残った、くぼみに集中する。小さな網を使ったり、素手で、たやすく、たくさん魚が捕れるという。

大将は、この情報にとびつき、仲間にはかった。栢山行が決まった。

何やら、たくさん捕れそうに思えた。夏の魚捕りも、面白そうだ。電車で行ける栢山は、楽しだし……。飯泉は遠い。『干し』の当日が、待ち遠しかった。

数日後、ブツテや、大小の網を持った一行は、栢山駅に降り立った。あとは一目散。下調べしておいた川へ急いだ。

目ざすは、田んぼの出水口と、用水路の堰のくぼみだ。

ブツテを使い、網を使い、手を使った。全身、泥んこになった。ウナギ、ドジョウ、ナマズ、少し小ぶりだが、手あたり次第にたくさん捕った。

味をしめて、その後、何回か行った。

いつだったか、腹をペコペコに空かした帰途、仲間の親戚で、食事をご馳走になった。真っ白で、もちっとした飯に、何とかいう菜っ葉の漬けもの——美味しかった。忘れられない。空前絶後。

栢山、富水あたりの川は、水がきれいだった。岸べにイジン

ゼリ(クレソン)が繁茂し、川底は砂。スナドジョウやホトケドジョウが棲んでいた。食べては、おいしくなかった。

昭和二十四年の、ある『干し』の日。泥まみれになって、魚を捕っていた。近くの家のラジオが、巨人軍の水原が、シベリアから帰還したニュースを報じた。坊主頭、夏のスーツで、まず、後樂園に帰って来た……。

もう少し、ボクの漁業小僧は続いたのに、なぜか記憶は、ここで途切れている。

蛇かごの針金を使って、鮎のぶつたたきをやったのは、たいぶ後のことである。(おわり)



— 飯泉河川富水産年intc —

1955. 9. 3  
Ohtsuka

寄稿

# 小田原の桜

上田謙 二

小田原の桜の名所はいくつかあるが、私が日頃から慣れ親しんでいる場所といえば、城址公園と西海子小路と長興山である。

私は散歩が好きだ。目に入る風景やハプニングを楽しみながら、ささやかな開放感を味わうのである。散歩となると行く先は、たいてい城址公園の周辺になる。四季を問わず、晴雨にかかわらず、城址公園に行ってしまう。しかし、目にいちばん楽しいのは、桜や躑躅や藤の花が咲き乱れる春であり、心がもつとも落ち着くのは、枯れ葉舞う秋である。私は小田原以外の土地に住んだことがないから、自然と城址公園に心を寄せるようになったのだらう。多数の色とりどりの鯉が泳ぐ堀を眺め、花々や優しい葉音をたてる緑の樹々の間に、身を置くのである。公園内にある市立図書館にも寄る。小一時間ほど、雑誌などに目を通してから図書館を出て、ほぼ城址を一周して帰る。

桜の時は、城址は華やかな雰囲気包まれる。堀に面した



学橋と隅槽

木々は、まるで霞がかかったような夢幻的なオーラを発し、桜の精が乗り移ってくるような感じがする。殊に隅槽をバックにした光景は一幅の名画を想わせる。何年か前、外国人の親子連れが陶然とした面持ちで眺めていたのを思い出す。ハラハラと桜散る堀を見つめていると、浮世を忘れ、きれいな気持ちになつて生きる喜びみたいなものが湧いてくる。汚濁の世にあって、幽艶な花の存在は奇蹟的でさえある。

の城址公園にも約三五〇本の染井吉野がある。桜の時はまた人生の節目でもある。入学式や民間会社、官公庁の人事異動が行われ、悲喜交々の世相が展開される。桜は日本の歴史において、間々政治的な花でもあったのだ。

あまりにも見慣れた風景だが、私は城址公園を愛する。小田原に住んでいる限り、生涯その中を散策するだらう。

西海子小路には、小田原文学館や白秋童謡館があり、折に触れて行くことが多い。この通りの桜も見事である。高級住宅街を彩る桜のトンネルと化す。文学館や童謡館は陳列物もさることながら、建物と庭がいいので、気持ち安らぐ。瀟洒な造りだと感心する。この西海子小路近くに、三好達治と坂口安吾は一時住んでいた。

桜も人生のそれぞれの段階において、違った見方がなされるのだらう。若い頃は、私は桜に華麗さと青春のおごり、それと裏腹なかなさを感じた。単純な花だと考えていた。しかし、中年になると、妖艶な暗い美、あるいは死の想念を惹き起させられた。梶井基次郎や坂口安吾の影響だらうか。今は、ただ花の美しさ、はかなさを素直に愛で

ればいいという心持ちだ。坂口安吾が、三好達治に誘われて小田原に転居したのは、昭和十五年(一九四〇)三十四歳の時である。安吾が有名な『桜の森の満開の下』を書いたのが、昭和二十二年(一九四七)である。

「桜の花が咲くと人々は酒をぶらさげたり団子をたべて花の下を歩いて絶景だの春ランマンだのと浮かれて陽気になります。が、これは嘘です。なぜ嘘かと申しますと、桜の花の下へ人がより集まって酔っ払ってゲロを吐いて喧嘩して、これは江戸時代からの話で、大昔は桜の花の下は怖いと思っても、絶景だなどと誰も思いませんでした。近頃は桜の花の下といえれば人間がより集まって酒をのんで喧嘩してきますから陽気でにぎやかだと思いきんではいますが、桜の花の下から人間を取り去ると怖い景色になりますので、能にも、さる母親が愛児を人さらにさらわれて子供を探して発狂して桜の花の満開の林の下へ来かかり見渡す花びらの陰に子供の幻を描いて狂い死して花びらに埋まってしまうという話もあり、桜の林の花の下に人の姿がなければ怖しいばかりです。」

安吾らしい常識的な見方を排した独特な文章である。彼がこの一文を書いたのが、四十一歳

の頃だから、中年の一捻りした陰画なのだ。無頼派などと呼ばれているが、彼の作品は端正である。安吾が小田原の桜を見たかどうかは分からないが、西海子小路は文学の香りの匂い立つ麗しい場所である。春爛漫の桜の開花期は、よけいにその感を深くする。

長興山紹太寺の枝垂桜は、毎年友人達と出かけて酒盛りをしながら見たり、そうでない年は妻といっしょに楽しんできた。私にはなじみ深い桜である。

紹太寺は、春日局の菩提寺として有名である。NHKテレビの大河ドラマ『春日局』が放映された当初は、特に大勢の人でにぎわっていた。同寺は、江戸時代の寛永十二年(一六三五)、小田原城主稲葉正則が府内山角町に、母の法号長興院と父正勝の紹太居士から、長興山紹太寺と号して建立した。その後、寛文九年(一六六九)に入生田に移転したという。新聞などで報道される枝垂桜は、この移転の際に植えたと伝えられている。だから樹齡は三三〇余年となる。開山は、京都宇治の黄檗山万福寺で隠元禪師の弟子であった鉄牛和尚である。当時は、東西十四町七十間、南北十町十六間という広大な寺域に、七堂伽藍が配置され、黄

檗宗では関東一の寺院であった。

元禄四年(一六八七)、江戸への旅の途中、ここを通過したドイツ人の医師ケンペルは、長興山の総門の壮麗な姿を、『江戸参府旅日記』に書きとめているという。

これらの堂塔が、幕末安政年間

の火災で焼失してしまつたのは、まことに惜しいものがある。入生田駅からすぐ近くの、茅葺きの本堂を出て橋を渡ると、鬱蒼たる杉林に囲まれた石段と石畳が続く参道がある。そのの四百段余りの石段を上り切つた所が、稲葉氏一族と春日局の墓所である。ここから少し下へ降り、杉林の中の間道を進むと、有名な枝垂桜が見え、花の時期はいつも大勢の人が見物している。高さ十三メートル、幹回り約四メートルの立派な古木である。かながわの名木一〇〇選に選ばれ、市の天然記念物にも指定されている。見上げると、流



長興山の枝垂桜

れるばかりに優美なラインを描いて、花傘を広げたように開花する。

古木なり長興山の糸桜  
ひとひらひとひら宙にたゆたふ

だいぶ前になるが、妻が短歌を習い始めた頃に詠んだ歌である。雰囲気は割合出ている。この当時に比べると、最近はやや心なしか樹木に衰えが見られるようになったのは気のせいか。

桜を愛でた古人は多いが、代表的なのが在原業平と西行であろう。

世の中にたえて桜のなかりせば  
春の心はのどけからまし

桜花ちりかひくもれ老いらくの  
来むというなる道まがふがに

在原業平(八三〇-八八〇)は、平城天皇の第一皇子、阿保親王と、桓武天皇の皇女、伊登内親王との間に生まれた。高貴な生まれにもかかわらず、低い地位に甘んじたのは、藤原氏にうとまれただけでなく、業平自身の中に隠者めいた素質があったためである。『伊勢物語』(九段)に、「身を用なきものに思ひなして、云々」とあるのがそれである。この世では、とかく世に受

け入れられない変わり者が、麗しい物語を生み出すのである。

桜を心から愛でた数奇者といえば、西行に止どめを刺す。西行は俗名を佐藤義清(のりきよ)といった。僧名は円位で、西行は号である。

元永元年(一一二二)に生まれ、十八歳で左兵衛尉となり、鳥羽院の北面の武士として仕えるようになる。北面というのは、白河天皇の時、院の警固のために設けられた制度で、弓馬の道はもとより、眉目秀麗で詩歌管統に堪能であることを要した。男色華やかなりし時代には、院のおめがねに叶つた若武者が、枕席に待てることもあつたそうで、位は低くても華やかな役目であつたらしい。(白洲正子『西行』)

そういう彼が世の無常を感じて出家し、桜狂いになる生涯は、確かに一編の物語りである。西行の桜の歌は無数にあるが、西行の桜狂いと、出家を求める心は二律背反するものではない。考えてみれば、現代人が真似のできるものではないし、芭蕉が憧れたのもよく分かる。西行を扱った能はいくつかあるが、『西行桜』がその代表である。辻邦生の『西行花伝』は鳥羽上皇の中宮待賢門院璋子との絡みを描写している。西行の永遠の女性である。白洲正子によると、西行という人間は不可解でとらえ

難いという。謎のある人間の方が、物語りになるのかもしれない。

春風の花を散らすと見る夢はさめても胸のさわぐなりけり

吉野山去年の枝折の道かえてまだ見ぬかたの花をたづねん

西行は毎年のように吉野へ入り、吉野山の桜を詠んだ歌は六十首に余る。西行以前に、吉野の桜を詠じた人はほとんどなく、それは西行の発見であるという。

与謝蕪村に、

みよし野のちか道寒し山桜

という句があるが、吉野山の桜はすべてヤマザクラだそう

花は、特に桜は、突き詰めていくと、西行のように風狂の域に入ってしまうのだろう。現代人が忘れて久しいことだが……。

長興山の枝垂桜から逸れてしまったが、以前は帰りがけに、紹太寺の本堂で普茶料理を食したものである。値段も手頃であり美味でそれが楽しみの一つだった。花よりダンゴという諺

を思い出して、妻と二人で苦笑したこともあった。いつかは、高遠や吉野山の桜を見に行くつもりである。

(了)

筆者紹介 上田謙二。本名、植

田武二。昭和十五年(一九四〇)、小田原市に生まれる。同四十二年(一九六六)、早稲田大学第一政治経済学部卒。

小説やエッセイ執筆を趣味とし、同六十三年(一九六八)、『父の涙』で第十七回「日本随筆家協会賞」を受賞。同書と小田原の風景も点描した随筆集『城と堀のある町から』の一部が、本史談二五二・二五三号収載の「植田又兵衛先生と小田原水道」に引用されている。明治時代の小田原町会議員として、学校教育や町営水道事業に功績を残した植田又兵衛の直系曾孫である。他に短編小説集『足音』を出版。日本随筆家協会会員。

(石井啓文)



# 折にふれて(二)

高田掬泉

## 沙垞<sup>シヤカト</sup>の百万長者

(昭和21年)

沙垞<sup>シヤカト</sup>——土着民の発音ではシャトコワと称んでいたが、我々兵隊はみなシヤカトン、シヤカトンと呼び馴らしていた——乱嶺閩警備隊から西方渾源城に通ずる街道にある小さな部落だった。

部落を貫く街道は川床を兼ねていて、大きな石がゴロゴロとしていた。傾いた東門の望楼から、古ぼけた大縁額と木像の鎮座します西門までの約三百米余りの路の両側には、土壁の家が雑然と並んでいた。石ころだらけの路にはいつも鶏や豚が我がもの顔にうろつき、その黒豚に負けず劣らず汚い小児達がかたまり合って遊んでいた。部落の中央に村公所の建物があり沙垞<sup>シヤカト</sup>の規約の掲示板が風雨に曝されてか、ついていた。村公所の十米程西によった処に、この部落では一番堂々とした門構えの家がある。それが沙垞<sup>シヤカト</sup>の百万長者の住居であった。

百万長者は何時の頃から乱嶺閩警備隊に出入りし始めたか覚えていない。彼は姓を劉と言ったが兵隊達は誰も劉など、呼ぶものはいなかった。誰が言ひ出したともなく、沙垞<sup>シヤカト</sup>の百万長者で通っていた。彼の風采を見ても、住家を見ても格別百万もの財産を持つ程の大人には見られなかったがこの辺りでは金持の百姓の部に属するのである。彼は警備隊の小林伍長と特別に懇親にし、屢々衙門をくゞってやって来た。その反面、小林伍長は彼に部隊の甘味品やら毛布などを相当に横流ししていたらしく、兵隊達は小林伍長が彼から莫大な借金をしていると噂し合っていた。女好きの小林伍長が渾源城から売笑婦を引つ張って来たのも彼の手引きだったらしいし、駐屯中唯一回写すことの出来た記念写真も、彼、百万長者が自分のカメラで自ら撮って呉れたものだし、又渾源から歯医者を連れて遊びに来、お蔭で私が擲弾筒の小さい部品を落として青くなっている時、この歯医者<sup>シヤカト</sup>の持つていた道具と彼の技術で部品を間に合わして呉れたこともあるし、兎に

角兵隊達には重宝な人間であった。百万長者は青白い阿片吸飲者のような顔をしていつも長い服をまとい、元氣のない声でボソボソと喋った。

私達は警備行軍に出ると必ず沙垞圪の彼の家に立寄って一休みし、お茶を御馳走になった。然し私が今でも忘れられない楽しさは最後に彼の家へ立寄った時の思い出である。その日は春が漸く近づこうとする三月初めだった。鳩班の小室四郎が鳩訓練にゆくので、長谷川古兵を長として小室の外に私を含めて僅か五名の少人数が乱嶺関を出発した。永かった厳冬もやうやく終りに近く、その日は空も眩しいような日の光りだった。山も畑もまだ雪で真白だったが、道路は人馬の往来で雪もなく、うらうらと立ち上がる陽炎さえ見られ、谿を埋めた厚い氷も底の方は解け初めたらしく、チロチ口水の音が耳の奥を快くくすぐった。その頃は既に近い中に部隊が大移動すると言う噂が確実となり、懐しくはあったが少し厭き厭きして来たこの蒙疆をおさらばするといふ心の楽しさが誰の胸にもほのぼのと立ちこめていたので、春めいた気易なこの行軍で私達はみんな心が弾んでいた。途々揚柳の梢が心なしか少し青く芽ぐんでい

に見えた時、私の胸も本当に湧き上がるような楽しさでいっぱいだった。軽く汗ばむ額から襟元にかけて春の温気が立ち上がるような気がした。

長谷川古兵は好きな歌謡曲を唄った。私も口笛を吹いた。

「愈々今月は移動だぞ」

「中支だそうだ」

「いや、南方だ」

「九州へ帰るんだ」

未知の世界へゆける楽しさに肩の銃も軽かった。鳩の訓練は沙垞圪より更に一里も先きの部落へ行く予定になっていたが、皆んなで相談してそこまで行ったことにして沙垞圪の百万長者の家で遊んで帰ることに一決した。

百万長者は住居にいた。片言の支那語でお愛想を言ひ乍ら私達は彼の部屋に入った。部屋は温突が利いて上衣を脱ぐ程だった。窓ガラスを透す光りは部屋内を明るく照らし、ピカピカ手入れの行き届いた朱塗りの箆筒が目覚めるように奇麗だった。私達は手真似で酒をねだると彼は愛想笑ひをして錫の瓶に白酒とそれから鶏の肉を持って来た。「頂好々々」「謝々」私達は相好をくずした。そしてその上に例の如く栗餅を請求した。彼は「明白(分った)とうなづき、やがて下男に命じて大きな

平たい皿に湯気の立ち上がる黄色い餅を持って来た。白酒は軽く疲れた肉体にとろけるように滲みわたった。鳩の小室四郎は直ぐに眼ぶちを赤くし、やがて真赤な顔になって温突の上に仰向いて転ってしまった。私は柔い栗餅を頬張り、一杯又一杯と白酒を楽しんだ。今日は気難しいエライ人達はいないし、古兵と言つても長谷川一等兵と兎金

一等兵丈けなので、気も心もゆるんで柄にもなく駄じゃれなど飛ばし、片言で百万長者と訳の分からぬことを喋ったりした。桃色の壁に貼つてある極彩色の大きな写真画の英語を読んで我的青島看々てなことを言ふと彼は好々と言つて笑つたりした。

春の近い或る日の午後。支那式に調えられた室内のありさま。酒と餅と肉の美味。辛いこととの多かつた乱嶺関警備の七ヶ月の中で最も楽しく、そして静かに沁々と思ひ出せるあるコマである。

### 白衣の日々

(昭和21年)

私が張家口の陸軍病院へ入つたのは昭和二十年八月十七日だった。既に無条件降伏といふ思いもかけぬ事実も明らかとなり、混乱と困惑との中に何かしら解き放されたような気持ちで

いたが、入院して中隊と別れる不安も、一旦入院してしまふとあの脚の負傷で散々厭な思ひをさせられた中隊から解放された嬉しさと、やっと助かったといふ気持ちに胸はふくれた。病室の清潔なベッドに汚れきつた身を横たへた時、親切な同室患者の案内で豪華なタイル張りの浴室で四ヶ月もの中支の垢を洗ひ落した時、今まで口にするこも出来なかつたような美味しい食事を口にした時、私は入院生活の楽しさを初めて味わった。

然し私のこの甘い満足感も、日の丸陣地を攻め寄せてくるソ連軍の圧力の為め、二十日の夜更け遂いに張家口から北京へ向けて引き揚げることになったので中断されてしまった。張家口を引き揚げる時のあの混乱、悲惨、居留民と軍隊が揉み合ひ乍ら列車に乗り込む折の目を蔽ふような惨状。敗戦といふ歴史画のあのコマが私には一生忘れられない強烈さで心の底に灼きつけられてしまった。普通なら半日で行ける北京へ私達の列車は三日間もか、つた。一握りのむすびと乾パンに飢えをしのぎ、車中では負傷が重つて三名もの死亡者を出したりしながらそれでも漸く北京西郊の清華園に到着し、こゝまで重たい想ひをしなから背負つて来た装具を

すっかり返納し、僅かばかりの私物を一と包みか、えて白衣を着た時は、再び安堵したのであった。

臨時病棟から外科二号の本病棟へ移ったのは八月二十五日であった。この病院は旧清華園大学の建物で、アメリカ式の美しい設備の整った病室が、患者五千名をも収容していた。私は一階の六号室に入った。同室者は全部で十二名だったが、独歩患者は私と淵上さんの二人だけだったので私は早速室長に推された。室長といふとエラそうだが護送、担送患者の為に食事を運び、糞尿の始末をしてやりたりするのが役目だった。

病室は白壁にかこまれ、窓外のうっそうたる茂みの緑を映して、ベッドの白布まで緑色に染まる程だった。朝七時になると飯上げになり、一杯の白ガユと味噌汁に空腹の八分目位を満たすと昼まで用がない。昼飯が待ち遠しい。繃帯交換も隔日だし、巡回に来る看護婦もまだ親しくない。私は戦友が手に入れた「私本太閤記」を読みふけた。昼飯の惣菜は楽しかった。油と砂糖を利かした惣菜の分量が少ないのが情けなかった。夕飯が済んで薄暮の色が部屋の隅に溜まり始めると、私と淵上さんは十二人吊りの大きな長い蚊

帳を吊って灯りをつけ、蚊帳の中に入って初秋の夜長を無聊に苦しむのであった。向ひの側の中田兵長は脚を切断され夜中に時々唸ったりした。然しその隣りの若い幹候の軍曹は、片手しかなかったが元気でよく流行歌を唄って部屋を明るくした。私の隣りにいる中村篤夫君は、伊東温泉に叔父さんの別荘があると云ふので特に親しくした。夜寝られぬまゝに、私はこの中村君とよく議論し、淵上さんを変えては敗戦の祖国の将来について語り合ったものだ。九時になると消燈し、真暗な蚊帳の中で昼間さいた復員の詔書から近く帰国出来ることに心が躍るのであった。

この清華園病院に私は丁度一ヶ月もいた。私の傷は難しく言ふと左下腿坐傷であったが、既にもう痛みはなし、傷口が小さくなるのを待っているばかりだった。少し病院生活に馴れて来た頃には毎日入浴もし、夕食後はまだ明るい病院内の柳の森を淵上さんと散策をし、酒保の新聞掲示場へニュースをよく見にでかけた。院内は何処へ行っても一抱えもあるような柳の柱で、それも日本で見かける枝垂れ柳でその長い葉はクリークの水面に届く程伸びていた。露っばいこの柳の路のそこ、に白

衣の覚束ない脚どりが見られた。そして時折り支那人の引くろばの小荷車が可愛い、鈴をリンリン鳴らせ乍ら走ってくる。私は久しぶりに俳句でも作って見たいと思ふ気持ちになった。

外科二号は特に軍規もやかましくなく、上級者だからと云って格別に威張る奴もいず、偶々入室して来た慰問団のマネジャーを訪れる若い踊り子達の華やかな姿も見られて私は久しい間のギコちない軍隊気分から解放された。退屈に苦しめられはしたが、一年半もの兵隊生活の中でも楽しい一ヶ月間であった。だから私の部隊「恵兵団」の一部が乗船地へ向かったというデマニュースを耳にした時も、早く退院せねばいけないと思ふ焦慮と、この居心地のよい病院と共に帰国出来やしないかと云ふ淡い希望とが半々に私の胸を占めていた。然し私の傷は一ヶ月の後既に殆んど快癒していた。九月の十九日私は中隊復帰を命ぜられた。白衣を脱ぎ久し振りで重い繃上靴を穿いた時、私は再び元の兵隊の気分に戻るのに数分を要しなかった。

(編集 早川初枝)

### 落穂集

本号では「郷土の自然」をメインテーマにしたが、今年の夏は、猛暑、酷暑、観測史上初の真夏日、70日を記録、そして、台風が8つも本土に上陸という厳しい環境の中で執筆者の方々に寄稿をお願いした。

嬉しい記録更新といえば、日本選手勢たちの活躍、アテネオリンピックのメダル37個、パリオリンピックのメダル52個、史上最多の獲得と、数々の種目で初入賞が見られた。

そして大リーグではイチローが前人未踏の年間最多安打、262本を打った。「ドキドキ、ワクワク、猛烈なプレッシャーが醍醐味だった」と言う。野球の本場米国大リーグでの快挙である。絶賛もこの上もない。

本会報も次号(一月号)で200号になる。多くの執筆者、読者の44年に亘るご支援によるものと思っている。プレッシャーに負けないようより楽しい会報を目指したい。

(編集 植田博之)

次号は「史談会の思い出」、「お正月」をテーマにします。投稿をお待ちしております。締め切り十一月二十日(会報委員会)



同郡小田原幸町一丁目二四  
三ッ本 塚本智 雄

和洋御料理登樓之御尊客様ニハ抽籤法ヲ  
以テ景物進呈仕候  
各位御機嫌充被爲在大賀此事ニ御座候隨テ樂店從來  
牛肉專賣罷在候處御引立ヲ以テ日増ニ繁盛ニ赴キ候深  
ク奉鳴謝依テ一層業務ヲ擴張仕リ更ニ西洋料理開始  
仕候ニ付テハ平生ノ御愛顧ニ酬ヒ且ツ開始ノ御披露旁  
尊來ノ御客様餘興ノ爲メ抽籤ノ法ヲ以テ進呈仕候  
間不相變陸續御來車被成下度奉希上候謹言  
和洋料理神戶牛肉一手販賣所  
小田原幸町一丁目三ッ本  
裏口ハ 松原神社前

同郡小田原幸町一丁目二一  
銀行役員  
辻村 清之助

同郡小田原幸町一丁目二四三  
富真師  
能澤屋 中田 長兵衛

同郡小田原幸町一丁目二四七  
葉婦屋 中津川 金五郎  
足袋、腹掛、股引、シヤツ、其他仕立物卸  
小賣  
同郡小田原幸町一丁目一八八  
神職  
村上匠 恒

同郡小田原幸町一丁目一八八  
辯護士  
室田 國太郎

同郡小田原幸町一丁目二六  
辯護士事務所  
山口 寛 明

同郡小田原幸町一丁目三六  
山口 利 平

同郡小田原幸町一丁目六  
雑業  
松村 長五郎

同郡小田原幸町一丁目二六  
大工職並ニ工事請負  
間島 國三郎

同郡小田原幸町一丁目一七  
二見 二見常 吉

同郡小田原幸町一丁目五〇八  
藤枝 重兵衛

同郡小田原幸町一丁目一六八  
藤 久治郎

同郡小田原幸町一丁目二五  
喜代世屋 笹子 磯 八

同郡小田原幸町一丁目番外地  
齋藤 芳 司

同郡小田原幸町一丁目九七扶桑教權少教正  
木村角 造

同郡小田原幸町一丁目六一四  
島本 一 二

同郡小田原幸町一丁目一七〇  
天利 廣 澤利三郎

同郡小田原幸町一丁目一七  
湘南堂 平井清 八

同郡小田原幸町一丁目一八八  
杉浦 久 珍

同郡小田原幸町一丁目四三二  
石井 金太郎

同郡小田原幸町一丁目三九六元妙泉寺住職  
石川 正 順

同郡小田原幸町一丁目二二六  
寶來樓 小澤 丹次郎

同郡小田原幸町一丁目三五二  
千代乃湯 小野田 卯之助

同郡小田原幸町一丁目二八四  
小伊勢屋 尾崎 佐兵衛

同郡小田原幸町一丁目無量寺住職  
大江 舜 成

同郡小田原幸町一丁目徳常院住職  
河口 祖 龍

同郡小田原幸町一丁目三六九  
高原 伊太郎

同郡小田原幸町一丁目海濱  
松月 高原 幾 藏

同郡小田原幸町一丁目二六〇  
中野屋 高杉 安 藏

同郡小田原幸町一丁目二二  
村田 梅太郎

同郡小田原幸町一丁目三三四  
綿屋 國見 甚 助

同郡小田原幸町一丁目三七一  
山口 良 助

同郡小田原幸町一丁目三五  
山本屋 山本 浅次郎

同郡小田原幸町一丁目二七三  
竹本樓 松本 半之助

同郡小田原幸町一丁目七  
菊本樓 菊池 キ 夕

同郡小田原幸町一丁目二二  
竹本樓 宮路 市太郎

同郡小田原幸町一丁目二六  
清水 義 路

同郡小田原幸町一丁目四三〇  
松本屋 廣石 茂 内

同郡小田原幸町一丁目四〇八  
廣瀬 清 吉

同郡小田原幸町一丁目三三八  
甲州屋 須藤 正 三

同郡小田原幸町一丁目二八六  
鈴木樓 鈴木 も と

同郡小田原幸町一丁目四九七  
日野屋 市石 又次郎

同郡小田原幸町一丁目四一  
富士本樓 鎌野 平 八

同郡小田原幸町一丁目二四  
玉の井 玉井 長治郎

同郡小田原幸町一丁目四五五  
内川屋 山田 幸 藏

同郡小田原幸町一丁目四六一  
大坂屋 藤井 甚兵衛

同郡小田原幸町一丁目五一七  
近土管屋 近藤 熊 吉

同郡小田原幸町一丁目二七三  
竹本樓 松本 半之助

同郡小田原幸町一丁目二二六  
寶來樓 小澤 丹次郎

同郡小田原幸町一丁目三五二  
千代乃湯 小野田 卯之助

同郡小田原幸町一丁目二八四  
小伊勢屋 尾崎 佐兵衛

同郡小田原幸町一丁目無量寺住職  
大江 舜 成

同郡小田原幸町一丁目徳常院住職  
河口 祖 龍

同郡小田原幸町一丁目三六九  
高原 伊太郎

同郡小田原幸町一丁目海濱  
松月 高原 幾 藏

同郡小田原幸町一丁目二六〇  
中野屋 高杉 安 藏

- 同郡小田原幸町三丁目  
小西 正 寛  
●薬舖  
●金液、おぎなひの薬、二靈圃、くだり  
をとめる薬、揚曹散、かぜの薬、衛生丸  
時侯あたりの薬、掃帚丸、つうじの薬、  
内國保険株式会社代理店
- 同郡小田原幸町三丁目五〇  
岩本屋 廣 井 徳 太郎  
●小田原名代黒紋袴、印半纏、大織絹毛茸  
他染物一式、湯江毛、洗張、星抜、染抜
- 同郡小田原幸町三丁目四六六  
東喜庵 鈴木 伴次郎  
●蕎麥、鶏肉、鱈、諸小鳥飼育御賣商
- 同郡小田原幸町四丁目六六八  
鹽屋 石田 彌五兵衛  
●海産魚類商、蒲鋒、雜魚
- 同郡小田原幸町四丁目六四八  
中村屋 金子 勇次郎  
●米穀、荒物、水車業
- 同郡小田原幸町四丁目六〇四  
山又 山田 又 市  
●海産、魚問屋
- 同郡小田原幸町四丁目五六八  
△山小 山田 小兵衛  
●魚問屋
- 同郡小田原幸町四丁目六〇八  
紫柴屋 柴 吉右衛門  
●廻漕業、鹽販賣商
- 同郡小田原幸町四丁目二八二  
小西屋 椎野 久 藏  
●砂糖、油、石油外荒物
- 同郡小田原幸町四丁目六〇七  
△日比與 日比谷 辨 吉  
●海産魚類商、蒲鋒製造業
- 同郡小田原幸町四丁目六六四  
キ 日比谷 日比谷 藤 助  
●海産魚類商、蒲鋒製造業
- 同郡小田原幸町四丁目五五三  
又水島 關 ツ ル  
●質屋業

「天利」とある廣澤利三郎は、天ぷら屋で泉鏡花の『城の石垣』にも書かれており(本史談一九六号)、現「だるま」料理店とは親戚であったという。

「湘南堂」とあるのは現平井書店。この後「平井積善堂」と称しており、この平井清八の先代清八(代々清八を名のつた)は明治三年、小田原城天守閣を九百両で落札したという。彼は、同十二年に四十八才で没しており、当時は二十八才の青年で、青銅製の鯨一對を横浜に運び、七百両で売却しているから、損はしなかったであろうという。

「小伊勢屋」の職業は「御旅宿、四季海水温浴」とある。当時、海水浴が一般庶民の流行で誘客の名目に使われている。

「小西」とあるのは、現済生堂薬局小西本店。前号万年町の平田勝富と本号椎野久藏の「小西屋」は、暖簾分け店で、後者は薬商ではなく雑貨商と言えよう。小西本店は代々「屋」は付けないと言われ、小西正寛は、「湖梅」の筆名で郷土史の魁である『小田原案内記』(明治二十九年(二八六)刊)を著している。

(編集 石井啓文)  
(つづく)

## 語り部委員会からのお知らせ 話してください！

変わってきた あなたの家、あなたの地域の年中行事  
.....お正月からひな祭りまで.....

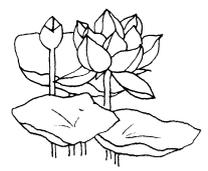
もうなくなった行事、形を変えて続いている行事など、あなたの家や地域の年中行事は大きく変わってきたと思います。

あなたも「語り部」となって、その様子を話してくださいませんか？  
行事にかかわる道具や行事の写真など、資料としてお持ちくだされば幸いです。

- と き 10月17日(日)
- ★第1回 午前10時から正午まで
- ★第2回 午後1時30分から3時30分まで

ところ 小田原市民会館 5階 第1会議室

### 第51回 小田原市民文化祭参加行事



# 小田原叢談

(四十七)

## 石井富之助

### 水産業指導の先達・水野正連

片岡永左衛門著『明治小田原町誌』と『函東会報告誌』とは明治時代の小田原研究資料として双璧ともいべきものである。

片岡永左衛門氏(一八〇〇―一八七三)がなくなられてからもう二十三年(昭和四十一年現在)になる。小田原町助役をはじめとして多くの公職を歴任されて、町の発展にその生涯をささげられた人であるが、郷土研究者としても知られており、いくたの著書を遺し、またその収集された資料全部を図書館に寄贈されている。これは図書館の特別集書「片岡文書」として、今でも学者、研究者の貴重な参考資料となっているのである。

『明治小田原町誌』は謄写版刷りの和装本五冊で、明治元年から四十五年まで(二六六―二九三)の政治経済、教育その他町民生活にかかわりのある重要事項を編年体にとめたものであるが、も

しこれがなかったら明治時代の小田原のことはほとんどわからなくなってしまうであろうと思われるほどの重要資料である。

『函東会報告誌』は、足柄上、下郡の学生とこれにゆかりのある者によって結成された函東会の機関誌で、明治二十三年十月二十九日に創刊されている。わたしの所蔵しているものは明治三十一年十月発行の第四十八号(内第八号、第四十六号欠)までであるがこれもまた明治二十年代の小田原の状況を知る上においてかかすことのできない資料である。しかも、聞くところによれば、国立国会図書館にも蔵されているが、同館のものはわたしの持っているものの半分ぐらいだということなので、よけいに重要になってくる。これは以前から図書館に預けてあり、近くほかの郷土資料とともに正式に寄贈することになっているので、どなたでもご覧になれるの

である。この『函東会報告誌』をめくっていると、今までまったく知られていなかった人物や事件にぶつかる。

ここにとりあげる水野正連(一八四三―一八八六)もその一人なのである。

明治以後における小田原水産業の先覚者、功労者といえば、鈴木英雄、二見初右衛門、山田又市、川辺正之助、青木倉次郎、さらに三浦市に移ってまぐろ漁業に一生をかけた奥津政五郎をはじめとしていくたの人の名を思い浮かべることができる。しかし、それらの人々のもうひとつ以前に水産指導の面で全国的に大きな足跡をのこした水野正連が、小田原から出ていることについてはだれも知らない。

『函東会報告誌』をみればすぐわかることであるが、一般市民にとつて漢文はちよつととりつきにくいし、研究家にしても特に水産に興味をもたない限り一顧もされそうもない。それではこのまま埋れてしまう。それがいかにも残念に思えるので、ここにとりあげることにしたのである。

報告誌第三号(明治二十二年十二月発行)の雑報欄につきの記事がある。

故水野正連氏はわが郷土足柄

の人で、はやくから水産社会に名声を博したが、不幸にして去る明治二十一年(一八八六)十月世を去られると、あの有名な金原明善氏、本会賛助員大庭永成氏、岡本貞休氏その他朝野の有志者が、同氏の功績を遺そうとして、その石碑を谷中の天王寺に建てられた。今その碑銘を岡本貞休氏から寄贈されたので左に掲ぐ。

とあつて碑文が載せられている。

「水野正連君碑銘」という象額は元老院議員四位勲三等田中芳男、撰文は織田実之、高田歳之助の書となつている。

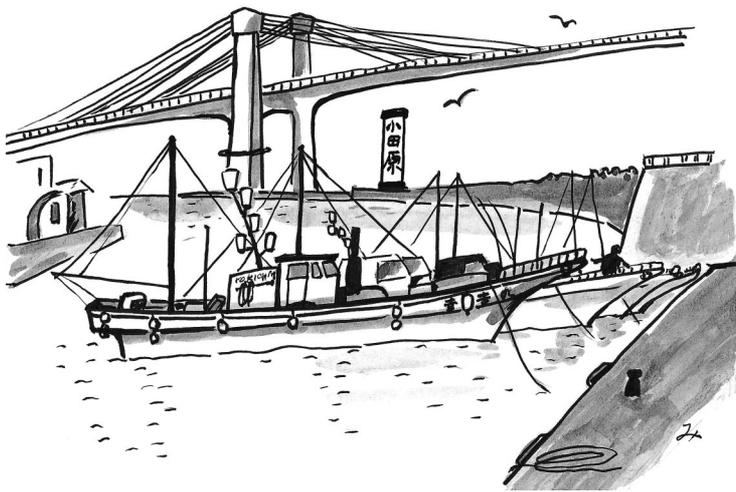
碑文はもちろん漢文なのでわかり易く解説してみよう。

わが国は七千二百余里の海にかこまれており、水産資源は非常に多い。これをとつて国富を増大することは急務である。近ごろ水産について説く者が相次いで出ているが、故水野正連君はその先達の一人として推されるべき人である。君の名は正連、通称を兵助といった。相州小田原の藩士に生れた。人となりは忠実で、書をよくした。明治二年(一八六九)、藩主は半隊長に選拔し、さらに郡政判事にしたが、廃藩置県が行われると足柄県に奉職した。十年(一八七七)に神奈川

県属に転じ、内国勸業博覧会の専務についたが、この時、水産に大いに関心を持った。翌十一年三重県に移つてからはもっぱら水産行政を研究し、漁民を指導したが、一方、県から命ぜられて、水産図説三巻をあらわして、管内沿海の漁業について述べ、これを第二回内国勸業博覧会に発表した。十五年(一八八三)、農商務省に転じて水産員となり、十六年には水産小博覧会審査官となつて報告書を作製した。ついで大阪府その他八県をめぐつて、水産の利害得失について考えるところがあつた。十七年、漁業税徴収法及漁村貯蓄法をあらわした。十八年、政府に水産局がはじめて設置されると君はその局長となり、試験課の仕事にたずさわつた。この時判任官四等に叙せられた。この時日本水産会は君を水産巡回教師に委嘱して新潟県に派遣した。君は佐渡に渡つて、いたる所で漁民の得失について講演指導を行なつた。越えて二十年には宮城、岩手両県を巡り、また山口県水産共進会に赴いて、その審査長兼伝習講師となつた。君は刻苦勉励、日夜をわかたぬふうであつたのでついに病氣におかされるに至つたが、みづから奮起して、男子がいったん国家の為に大きな利益をはかろうと

考えたからには、なんで死などにかかわつていられようか、といつた。開会の日には病をおして早くから会場に出かけ祝辞を読み終つて倒れ、ようやくにして蘇生した。二十一年一月、東京へ帰ることになつたが、その帰り道に兵庫県に立ち寄り、なお漁業振興について督励したので、いよいよ帰る時になつて病状は一段と悪化した。それでもなお水産の利を口述してやめなかつた。これらの功績によつて四等技手に進叙され上級俸を賜わつたが、十月十一日遂に世を去つた。年四十六。官は特に金一封を賜ひ、大日本水産会会頭顕仁親王殿下からも弔慰金を賜わつた。なきがらは麻布浄因寺に葬つたが、今、谷中天王寺に遷すにあたり、知人友人相謀つて、この碑を建てた。(銘は略す)

これが碑面にきざまれている水野正連の略歴であるが、これを見て、わたしがもつとも



カット 内田美枝子

興味深く感じたのは、かれが実務家として名をなしていることである。明治四年に設けられた足柄県の下級職員を振出しにして新しい時代に一步を踏みだしたかれが、明治十年神奈川県属になつたのを契機として水産に関心をもち、近々十年余の間に、全国的な指導者になつていふことである。当時はまだ明治新政府ができて間もなくのことであり、練達な実務家という者もそう多くはいなかつたからとも考えら

れるが、全国的な活動をするという位置にまで達する期間がいかに早い。ここにかれの非凡な天性となみなみならぬ努力とがうかがえる。

金原明善がまっさきに建碑の発起人になつていふことにも注目してよいであろう。金原明善といえば、愛知、静岡両県下において養蚕、植林、牧畜を奨励し、天竜川浚せつのも動力となり、あるいは免囚保護を行なうなど、実業家としてまた社会事業家としてあまねくその名を知られた人である。その明善とおそらく親交があつたのである。それだけでも水野正連という人物を推測することができるといふものである。

かれについても一つ興味を持たざるを得ないことは、小田原人としてはまれなタイプ——二宮尊徳によつて代表される、コツコツとたたき上げていき、初一念をつらぬきとおすという勤勉努力型に属していることである。

わたしは他の土地の人からよく小田原人気質について聞かれる。そんな時、いつもきまつて頭をかすめてとおり過ぎる一つの記録がある。

文政三年(一八〇二)、伊勢国藤堂光寛の創めた有蔵館の蔵版の中に『大日本性気録』という本があ

る。実際に見たわけではないが、これは国々の人情風俗、いかえれば国がら、人がらをしてきたものであるらしい。その中に「相模の風俗」というのがあって、これもいつどうして写したのか忘れてしまったが、ともかくわたしの郷土資料書留帳にそこだけが写しとってある。それを紹介すると――。

相模の風俗は、人の氣質が変りやすく、ある人が出世をしたる繁栄したりすると、いろいろ縁故をたどって親しくし、また今日まで親密にしてきた人でも、その人が時を得ないで勢力が落ちると遠ざかってしまう。智はあるけれどもかえって智に迷い、信義を知っているようにして実は信義がないということ

である。

相模の国とあるからには、当然小田原も含まれているわけで、どうもこれは頭にくることばである。こんなことは全国共通ではないかと思ってもなお気にかかるのは、心の底に当らずといえども遠からずという、半分肯定するものがあるからである。

江戸時代に幕府の政策によって、百姓町人は苦しい生活をいられていた。普遍的にいえばたしかにそうであろうが小田原というところは気候温暖、山海の産物が多く、酒匂川のはらんをはじめとして地震、火災等いくたの天災人災に見舞われたとしてもほかの土地にくらべたら比較的いい方の部類で、それほどあくせくしなくても結構暮

らしてこられたのではないかと考えられる。このような環境に住めば人間というものは、自然現状維持を望み、大きな変革を好まなくなる。そしてその中でうまく立ちまわる。知的で温和ではあるが、いわゆるがめつさ、しんぼう強さがない。小田原人氣質というものは、一般的にいったらこんなもので、もしそうだとすると『大日本性気録』のいっていることもまんざら当っていないこともない。

しかし、その一方において主体的で、科学的で、しんぼう強さ、がめつさでは一流といつてよい二宮尊徳という偉人が出てくることも事実であるし、この系列に属する人も決して少なくはないのである。

水野正連もそのうちの一人だといつてよいであろう。

水野正連についても少し何か資料がないかと思つて、図書館の川添司書係長(当時)に調べてもらったら『小田原有信会々報』(昭和十五年発行)の中の「小田原藩士録」でこんなことがわかったと教えてくれた。

水野兵助、後に正連と改名、先祖の本国は越後の国で、小田原に来て大久保家に仕えた。幕末における食禄は三十七石で、旧屋敷は手代町(栄町二丁目)にあったという。

- 今のところ、かれに関する資料はこれだけしかない。かれが郷土小田原の水産業にどんな影響を与えたか、というようなことがわかったらおもしろいと思うのだが、これは今後の研究に待つほかはない。
- しかし、前にも述べたとおり、水野正連という名さえ知られていないのだから、まず紹介だけはおこうと思つて書いた次第である。(編集 田口鏡子)
- 新  
会  
員**
- 石川 健三 TEL 二二一五四一四
  - 栄町一 一九一六
  - 日下部庄一 TEL 二二一五六九三
  - 板橋五九六
  - 益田 昌子 TEL 二二一五六九三
  - 城内二 一六一〇二 TEL 一三三一一〇〇八
  - 賛助会員
  - 日本金属工業箱根保養所
  - 島田 保子
  - 箱根町強羅一三三〇―一三四六 TEL 〇四六〇―二一四三六六
  - (株)エンドー 遠藤徳太郎
  - 小田原市下大井二三九 TEL 三六一〇七五一

銀杏散る

剣持芳枝

メリンスの端切れ懐かし鳳仙花  
萩咲くや城の広場は避難場所

駅前のからくり時計雁渡る  
十六夜や剃刀しまう小抽斗

むかご飯作務衣の僧にもてなされ  
電柱のなき国道や銀杏散る

文化の日出かける程の用事なし

# 酒匂史談 ⑱

## 川瀬速雄

### 3 酒井家

屋号「大山屋」と云ふ。大山姓が酒井に変わった時期、理由は不詳だが、姓を変えるには何かしらそれなりの事情があったことだろう。五郎右衛門を世襲、中古名主を務めた。

旧家五郎右衛門、祖先は当所草分人(開創者)の一人なりと『風土記稿』にある。家蔵に豊太閤小田原陣の制札一通。寛永十七年(一六四〇)稲葉美濃守正則が領主だった頃、五郎右衛門宅地の蜜柑運上赦免の状がある。

覚  
さかわ名主やしき之ミつ(通)  
かん御免し候間如し此候。(鑑)  
以上

寛永拾七年 御勘定所  
十二月五日  
酒匂之郷  
名主中  
五郎右衛門  
《相州古文書》

※ みかんの年貢を免じたもの。「御勘定所」は稲葉氏の年貢を管理する役所であるが、当時勘定奉行と称する役人がいたかどうかは不明である。

近世五郎右衛門が名主を鈴木新左衛門に引き継いだのは、何時、いかなる理由であらうか。古文書で明らかなのは、寛永十七年(一六四〇)蜜柑年貢免除の時は名主であったが、山王原名主忠右衛門文書(石井啓文集録文)に、文化十四年(一六三七)酒匂村前々名主役相代り候とある。

思うに、一六四〇年(一八一七年)の間に酒匂に何らかの事件があつたこと、延宝五年(一七二六)月、酒匂村の田植が藩の規制をこえて派手になり、名主組頭が三十日間籠舎に入れられた。又鈴木新左衛門が名主になったのは延宝年中(一七二五)頃と云われているので、この時のこの事件のため

はなかるうか、或は姓を大山から酒井に変えたのかもしれない。

故老談話に、「大正年中(一九二二)、裏の物置の土間に突然大きな穴がポツカリとあき、北西の方向に続いている。人間が歩ける大きさで太閤の抜け穴ではないか、いや小田原城の抜け穴ではないか、と大騒ぎになり、近郷から大勢の人が見物に來た。仕事を頼んで探索してもらったが、十間程入った所で半分崩れており、恐ろしくてその先は無理ということ、穴を埋め戻した」。名主当時の古記録が多数残っていたそうだが、関東大震災後の九月十五日の大雨で水浸しとなり、損失した由。惜しいことをした。

一門に二宮金次郎の門弟、酒井儀左衛門(明治十七年(一八八四)卒)がいた。穏和で謙虚な人で、名主、組頭を常にたて、近世酒匂の農業、産業等に関して助言していた陰の功労者であった。その主な業績は、報徳仕法の指導、悪水堀の整備と二毛作の指導、養蚕の奨励では上

州の長谷部万作を招いて普及に務め、又、絹ハンカチの刺繍の指導等、その功多大であった。酒井家及儀左衛門の墓は上輩寺にある。

### 4 鈴木家

① 出目『風土記稿』に、新左衛門、鈴木を氏とす、世々名主を務む。家乗、安永十年(一七六二)早雲寺住侶所撰』によれば、文治中(一一〇三)源廷尉義經奥州に走る。家臣鈴木三郎重家偶嬰兒を懐に後を追ひ、此家に來り、寓居すること数日、一日主に謂て曰、「吾廷尉と死生を共にせんと欲す、今兒を主に託す、幸に育養の恵を給りたし」。又觀音金像(長五寸五分弘法大師作)一軀を出して云う、「これ余が守護仏なり、兒長ずるの後、願わくは委授されたし」。是に於て重家終に奥州に赴く。主、子なきをもつて遂に彼兒をして嗣子とし、家を襲しむ、依て鈴木を氏とす。

② 裔孫鈴木大学助成脩に至り、小田原北條氏に仕う。『北條役帳』に、

「鈴木大学助、中郡厚木を領せしこと見ゆ、同人ならん、成脩城北荻窪村に一小庵を建、彼金像を安置す。今彼村に現存する成脩庵是なり」と。天正の役、成脩小田原城に籠り五月六日、渋谷口に戦死す(家系)。「北條盛衰記」に、「鈴木大学助しほり口の役所に居て、毎日敵陣に向つて矢を放つに、あだ矢更になし、敵、又大学を討たんと心がけし程に、終に鉄砲に当りて死す。大学は旗本の弓大将にて、精兵矢継はや無比類射手なり、前々数度の合戦に先をかせ、高名を顕せり、指物に鎧と云字を書ける。

或時太田十郎家中に春日左衛門と云者、大学に向かいて、其方弓の名人其名を得たり、彼と云すと云、指物に弓と云字を可書に、鎧と云字を書くは、不審なり、扱鎧は旗本の鎧か、関東の鎧かと問、大学旗本の鎧と答ふ。左衛門聞きて、旗本の鎧に於ては無是非苟も此春日左衛門有て、関東の鎧とは、不可名と、とがめけるとぞ」。

『見聞随筆』に、「鈴木  
大学助は、勇将殊に強弓  
を射けるが、城中より射  
出すに、鎧も甲もたまた  
ず射通しけるが、矢に鈴  
木大学助成仏と小刀を以  
て彫付しとなり」。

天正九年(一五三)北條氏  
直書状』に、高橋郷左衛  
門尉を鈴木大学の陣場に  
送り、大学の指揮下に置  
いた。

鈴木大学の弓にまつわ  
る挿話を一つ。

鈴木大学の弓

鈴木大学は、よく遊び  
に立ちよる弓師の店頭  
で、ある日、主人が話の  
ついでに、「いや鈴木先  
生、私も驚きました。今  
日参りましたお客様が、  
寸弓を作れという御注文  
で御用を承りました。私  
も永年の渡世でござりま  
すが、寸弓などという強  
いものを作らせて戴くな  
どという事は、めつたに  
あるわけのものではござ  
りません」。

鈴木大学はそのお話を  
絶えず微笑を含んで聞い  
ていたが、「えらいな、寸  
弓を引くとは」といって、  
店のかたわらにあった極

く弱い弓を自分でとつ  
て、矢をつがえ、その処  
の土間の土に向つて  
ヒョーと射かけた。

そして主人をかえり見  
て、「ノウ主人、その寸弓  
を引くという御仁が、店  
へ来られたらこの矢を  
とつて貰え」と土間に深  
く突たつた矢を指した。

このほかにも、大学の  
弓の話は二三伝えられて  
いるが、自分はこの話が  
一番好きである。

寸弓といえは弓の肉の  
厚さが一寸あるのだけ  
ら、そんな物を使いこな  
すのは容易な業ではある  
まいが、何時の代にも、  
虚勢を張つて威張りた  
い人間は絶えぬとみえる。

その寸弓を注文した男  
が、実際は使えもせぬ強  
弓を、ひけらかしている  
のに対し、鈴木大学が非  
常に弱い弓を使ってみせ  
た態度のなかに、弓の奥  
義を極めた一芸の達人ら  
しい、ゆかしさがある。  
弓に人間が使われるので  
はないという真実を端的  
に示していて面白いと思  
う。  
家康には叱られるだろ

うが、弓の大学には好意  
を持つことができるので  
ある。

鈴木大学の墓は、小田  
原市谷津の桃源寺(曹洞  
宗)にあり、自然石に鈴木  
大学助墓と刻してある。

③ 成脩の子某、後に一  
閑居士と号す、是より十  
一代にして、今の新左衛  
門に至り、世襲新左衛門  
を名乗り、延宝年中(一七  
三)頃より名主を務めて  
いた。思うに延宝五年(一  
七三)酒匂村の田植が藩の  
規制に反し名主、組頭等  
が咎められた、この時、  
名主酒井五郎左衛門に  
代つて名主を務めるよう  
になったのであろう。

④ 享保年中(一七二六)享保  
尺(物指)の特権を得て製  
造を始めた。

⑤ 宝暦年中(一七五二)法善  
寺日敬上人が七面堂を建  
立したが、鈴木家の寄進  
によると思われる。

⑥ 寛政元年(一七九九)酒匂  
川川越の掟が公布される  
と、川越にか、わる業務  
は繁多となり、今一人の

名主川辺段右衛門と力を  
合せていたことが、川越  
にかかわる古文書で伺え  
る。

⑦ 元文年中(一七三三)小田  
原地方の俳諧は繁栄の頂  
点に達し、酒匂俳人の中  
心人物は、新左衛門(杉  
鳥)であった。酒匂村の主  
な俳人は杉鳥、野杏、麦  
雨、麦之、卯雨、嬋山女、  
大梁、酉居、柱露等がい  
た。(詳細は酒匂の詩歌で発  
表する)

⑧ 明治六年(一八七三)明治  
天皇、小田原御幸の帰路  
休息なされた。今、同家  
跡地に昭和十五年(一九四  
〇)十一月三日建立の記念碑  
がある。酒匂中学校玄関  
前の樹木の化石は箱根よ  
り出土した石で、献石と  
して休息記念碑の所に  
あったが、酒匂中学建設  
を記念して中学校に移設  
した。

⑨ 明治七年(一八七四)火災  
にて家宝焼失。

⑩ 明治十二年(一八七九)第  
一回神奈川県議会議員選  
挙に足柄下郡より立候補

(定員三名、鈴木新左衛  
門当選。

⑪ 明治三十一年(一八九六)  
鈴木重一、第二代目酒匂  
村村長に就任。

⑫ 大正六年(一九一七)鈴木  
重一(大正八年卒)故あつ  
て家財を処分(競売)した  
(我が家の古書類はこの時  
購入したもの)。倉を取り  
壊した時、干乾した「タ  
ニシ」三俵と美しい貝が  
らが十個程出てきた。こ  
れは非常の時の備えで、  
タニシ三俵は雑草と混ぜ  
て食せば、村人一年分に  
相当する食料とのこと。  
貝は夜光貝といい、装飾  
品に使う貴重品で、売却  
して村の財源用にとのこ  
と。名主ともなれば常に  
村の事を考えていたので  
あろう。

(まとめ 早川初枝)



# 中村原郷 の思い出

⑭

遠藤治郎

## 千羽籤

昭和十年(一九三三)頃迄は千羽籤を仕掛けて小鳥を捕ることが出来たようだ。養父は雪が三日降り続くと小鳥が餌を求めて群をなして来るといつていた。

苦竹の節のない部分を一穂角位に割って百本程作り、「モチ」を菜種油で煮てからませたものを、秋脱穀した場所を一米四方程雪を除いた所に刺し、多少の中米を播いておく。小鳥は三日も餌にありついていない。群れてそこに舞い降りる。百本程刺してある千羽籤に羽をからませ動けない。藁塚の蔭に身をかくして、素早く行き何羽か捕える。日が高くなると「モチ」が光って警戒して降りてこない。多くは頬白という小鳥で、雀は警戒心が強くかからないうことだった。

また養父は目白、鶯も良く捕ったようである。目白は霜の降らない時期に捕えた。鳴き声が違うそである。近年は開発が進んで近くに雑木山が少なくなつて小鳥の数も少なくなつた。

小鳥を飼うにしても許可が大変とか、早や七十年近く過ぎた話である。

## 下原の石橋

中井羽根尾線県道は、十三尺「四米」幅だった。その内に一尺五寸位の溝があり二トン車位がやつと通る程で、年々車輪が大きくなつて通行が困難となつた。昭和二十四・五年(一九四五)当時の川本村長の発案で、押切より下中駐在所迄の一部拡幅一部新道工事により現在の「六米」幅になつた。その折に中村原公民館入口に石橋が取り除かれて火の見櫓の下に幅二尺厚さ一尺五寸長さ六尺の木

材十本が積まれてあつた。小生は昭和三十一年度の道路委員に選ばれた。この地は三方から雨水が集中して塔台川に流れ込む水路二尺を木材の土溜で二・三年に一度修復するのが例であつた。その石橋の石を土溜にと提案して、耕作者十数人がかりで「コロ」で運んでもらつた。その部分は永久的となり途中の土橋もコンクリートに造り替え、皆さんから感謝された思い出の道である。近年羽根尾工業団地の造成により幅員九米になり田畑も失われて昔を知る人も少なくなつた。

## 召集令状

昭和十二年(一九三七)七月日支事変が勃発した。その年七月十五日は、小祭といつて、明治初年頃白髪神社に合祀された御霊代を神輿でお迎えして村

中を練り歩く。村の常設の家と十数軒の家が休み場所である。その家は戸板にお酒一升と酢物と豆腐と小麦粉を軽く練つて油で揚げた菓子供えであり、子供の頃神輿と

一緒に廻つてご馳走になつた。次第に担ぎ手が酒に酔つて板塀をこわしたり、神輿を倒したり、宮付が当時は夜八時頃で、小生の家の北側に相模半白瓜小屋があり、その空地に休む。神輿に提灯をつけ、子供等も提灯に火を入れて高張を先導に進む。小林材木店の処で休み、皆さん酒が廻つた頃である。その時、一台のサイドカーが通り過ぎ、軍服の人が同乗していった。一瞬皆が静かになつた。誰言うもなく召集令状の使者ではないかとささやきあつた。ともかく、その日は神輿の宮付も無事済ませた。翌朝、中村原の小澤さんと武井さんに召集令状が来た。日支事変も拡大して日毎に召集令状がきて、妻・子供の有る人が戦地に赴いた。

## 力持ち

昔は大力ぢりきの人が居た。曾我の五郎が曾我山から小竹山に投げて七つに割れて七つ石となつたという言い伝えがある。城前寺の境内に曾我の五郎の

足跡がある石があるが、昔殿様の前で庭石の向きを変えたという話である。中村の地にも力持ちが居て、火見櫓の前の墓地の側にあつた平たい五十貫以上もある大きな石を持ち上げたという。養父は、母の生家に年始ながらリヤカーで餅菓を貫いに行く。餅菓は粘りが強く草履や縄を作るのに藁をすぐつて束ね、水で程良く濡してこの石の上で掛矢で打つて柔げる手伝いをした。古老の話ではこの石を下駄履で持ち上げたとか。また、吉野某、橋川某氏も力持ちであつた。中村原小字に太田神と太字に彫つた五十貫以上の石碑がある。役員が何かの寄付をお願いに行き、出し渋る家の門口に、夜中に、この大石を据えた。その家は幾人も頼んで元の位置に直し祀つたとか。太田神の碑を話す老人もいなくなつて七十年近い歳月が過ぎて、この頃は力持ちと言われる人もいない。

## 布団の打ち直し

昭和の初め頃迄は、村

内に綿屋といって綿を弓糸ではじめて打ち直す業の家が二・三軒もあったと聞いた。古くなった蒲団の綿をその家に持って行き、弓糸で打ち直し、新しい綿を足して蒲団を作る。何処の家でも蒲団を作るのは婦人の仕事で、農閑期に行った。太平洋戦争中、綿が不足して農家に綿の実の配給があつて、小生の家でも五畝位作つて初冬頃固い実がはじめて白い綿が咲く。子供の頃綿摘みをさせられた思い出がある。この頃は綿花の代りに化学繊維になつて綿打職人もなく使い捨てが多くなり、行政も始末に困惑している様子である。平成不況の関係か綿工場の閉鎖が多いとか。綿屋の話は昔話で近年は綿製品が見直されているそう。綿は外国の安い綿花に押されて綿を耕作する農家もない。子供の頃摘んだ真白な綿の赤茎に実つた昔のことが懐かしく思い出される。

### 虎が雨の話

陰曆五月二十八日に降

る雨、この日曾我の十郎が討死しそれを悲しんで愛人の虎御前の涙が雨となつて降ると伝わっている。この日は曾我の十郎と五郎が田圃を踏み荒すと古老に聞いたことがある。小学校高学年昭和の十年頃は良い農葉がなく、生徒全員が出て田圃の苗床の蛾と稲の葉に産み付けた卵を捕る。二寸位の苦竹の筒に手拭で作つた袋を結び紐で腰に着け、蛾は両手で打ち卵は葉ごと切つて筒に入れて学校に持ち帰る。先生方が焼却すると聞いた。秋には稲が実る頃蝗が発生する。高学年の生徒が総動員して蝗捕り、苦竹の筒に袋を結び蝗を捕る、蝗は素早く葉裏にかくれる。子供の動作ではなかなか捕れない。夢中になつて捕れた量を袋ごと見せ合つたものだ。学校に帰ると大釜に湯が沸いている。袋ごと釜に入れ死なせて羽根と足を切り取る、気味悪い。先生がこの蝗を問屋に売つて文房具を買う足しにしなさいと言われて取つた思い出が七十年近く前のこと。

### 道祖神

前川の露木青果店の西側の道を登りつめ、右に曲つて、東海道線の南側の細い道を四・五百米進む。東海道線の踏切を渡つて進む。御産原の下に出る。昔は八百谷さんの高さの台地で松の太木が何本もあった。東海道線の工事に部落で土を売つた。村人は一日五十銭で土木工事に出たと聞いている。八百谷さんの東側を進み、途中右に曲つて公民館の東側に出る。蛇ノ久保を通りぬけ、下原橋を渡つて禪龍寺の下へ、そして西側の道を行くと山西部落に出る。志澤仙さんの西側を通り小竹下部落にでる。坂呂打越、北田へと続く大山道があつて、辻々に道祖神があつたと。村人は節分には暗い内に起き出て大山さんに豆撒きに行つた、と古老に聞いて早や六十数年も過ぎた。今は遠く成田山や最乗寺に行く人が多いとか。厄払いの行事はいつ迄も残したと思います。

### 草競馬

昔は田畑を耕す為に馬が多く飼養された。四月十四日は沼代馬場で競馬が行なわれた。小学校が半日で休校となり、急ぎ帰宅して眞砂の野道を小走りに馬場に行く。年によつては桜が満開。年によつては葉桜になつている。近在の農家の馬が集まつて来て競馬が始まる。その日は沼代の祭り。野店が十数軒も出店して、綿菓子やニッキの根や丸いゴム毬にゼリーを詰めた菓子や何銭かのお小使いで買つて、食べながら競馬を見る。勝馬には青竹に幟を立て、帰つて行く。時の過ぎるのを忘れていた。中井の八幡神社の祭りは四月二十日。養父につれられて行く。すっかり葉桜になつている。帰りに遠藤の叔母の家に寄つて酒盛りとなる。夕暮れて家路につく。大口堤の草競馬も名高かつたと聞かされた。次第に役牛や耕転機に変わつて野馬も少なくなつて、昭和十四・五年頃には終つた様です。

### 草相撲

昔は十月九日が白髭神社の大祭で、御産原へ神輿が出て青笹竹を四本立て注連・標を張り、座につかれる。土を二尺程盛り押切の浜より砂を運んで土俵に敷き、丸太木を四方に立て上部を厚い板で組み、土上に葎箆を乗せて、丸太木に菰コモを巻き、縄で五辨の花結びに結んで塩の杖を結ぶ。近在から力持ちが集まつて来て、盛大に行なわれた。ある古老の話では、各部落より山車が出て御産原に集まる。昔の御産原は、現在の八百谷さんの高さで松の太木が何本もあつた由。その古老は、養子故にいつも山車の後棒と言つて山車のかじ取りに使われたと話してくれた。神輿は夕方にお立ちになつて、高張や神輿に提燈をつけ、宮の氏子総代、村役の人、青年団の人、子供達が手に手に提燈を持って先にたち宮付となる。子供の頃一緒に歩いて行き暗い道を帰つて来た。草相撲がなくなつて淋しい。

季節労働の話

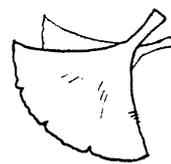
昭和二十九年四月一日付で下中農業協同組合の理事に選出された。二十八才何ヶ月の身。辞退を申し出たが高点故に引き受ける次第となつた。下中農協は二十六年度より預金が封鎖され今にも倒

産寸前であつた。組合長の森さんに頼まれて国の公資金三百萬円の借入の連帯保証人になつた。その頃より養父は尿道ガンにかかり印刷局病院に入院、当時山近先生は副院長で、場所が悪いので手術は出来ないとのことだつた。当時は田一反十

万円位だつた。農協の会議や共済事業の推進等農協再建に全力を尽す。野菜安で乳牛の多頭飼育に向つて五頭で月収が五萬圓あるから入院のお金の心配はないと養父に話しておいた。次第に田畑が荒れて稲の収穫も遅れる。養父は他界して葬儀

等で多忙で、一層農作業が遅れる。その頃蜜柑専業農家は数人の季節労働の人を雇つていた。男子一人と女子一人を農協にお願いする。男子はその後十年間働いてくれ、女子は小生の妻となつてくれた。

(編集 剣持公一)



片岡日記 ③1

大正十四年九月

十五日 晴

九時発にて横浜市役所二堀田璋左右氏を訪ふ。横浜市史編纂之主任にて史材蒐集之懇談アリ。承諾して高田方ニ立寄る。午後五時大森山王ニ徳富蘇峯先生を訪ふ。当春送付せし野花の開花せしとて、夫人と兩人にて庭内を案内せらる。談偶ニ金融界之近況ニ及ぶ。余、曰或者ハ自著を先生ニ贈り、批評を乞ふ有れハ國民紙上ニ批評せらるるを見るに、少しも曲庇なく、著者ハ返て呆然するも有らむ。されハ先生ハ過賞

片岡永左衛門

するハ御嫌なるへきも、私カニ拾余年就職の銀行も震災之余波にて止むなく昨十一月以来休業したるに、整理の方針も立、目下預金者二切摺懇請中なるも、小田原支店之預金者ハ拙者ニ好意を表し、氣ノ毒なりと最早九分九厘も承認せしハ、拾数年披見する國民紙を透し先生之勤化も幾分之原因なるべし。さすれハ此意味ニ於て、今日ハ御賞誉有りたしと談笑せしに、先生ハ夫ハ結構真実に衷心よりほめますと主客三人共ニ、一笑せり。

持参の戌辰箱根戦争見聞記と武田、北白川両妃殿

下之教育日記を贈り、同家を辞して、親一方ニ至れハ、今日ハ上京之通知したれハ、早めに帰宅し待居たりとて、一家打寄談笑に夜も更く。

十六日 晴

帝国大学史料編纂掛にて、辻善之輔博士ニ面会乞ニ応し、小田原地方之神佛分離當時の状況を話し、猶同所ニて相田二郎氏ニ面会、兼而謄写希望の北条時代の地図と片岡文書解四冊を貸与ス。午後一時より青山会館ニ徳富萬熊氏追悼講演ニ龍夫と参聴、六時親一方ニ帰宿。

十七日 午後より大雨

午前上野ニ院展ニ科展佛国絵展を見て親一方ニ帰宿。

宿。

十八日 雨

親一方ニ滞在、午後貴衆両院雨中ニ焼失。

十九日 晴

十時発にて帰途ニ就く。本年ハ降雨多ク氣遣たりし稲ハ二百十日も廿日も無事ニテ平作以上之作柄にて車窓より見るも心地よし。

廿日 晴

午後より宮下ニ行き、仙石、安藤両氏ニ会談、安藤氏ニ止宿ス。

廿一日 晴

熱海線開通ニ際し熱海ニ於てハ宿泊料其他不相当りと、甚しき世評之為、箱根ニ於てハ組合協議

し、宿泊料等引下しも本年は遊客少く、不況なるハ勿論震災以来ハ茶代等も申合たる如く半減となれりと。仙石氏村長等の来談あり、安藤氏の要件を了り五時帰宅ス。

宮ノ下五首

草山に日をさへきりてかけ落す雲の形に見入りてそ立つ

秋風のそよき静けき湯の宿のおはしまに見る立草の山

秋はれのそらにそびゆる立草の山をかすめてからす飛ゆく

谷水の静けき音に耳澄みて心のちりも洗ふ湯の宿

とひて来る人をまつ間  
の湯の宿に足さし伸て  
ひるみおぞする

廿二日 晴  
午前出勤。十時より藤沢  
本店に行。五時帰宅。

廿三日 晴  
横浜史編纂係より依頼ノ  
海保氏碑石実見ニ、松岡  
氏二行。現況を堀田主任  
ニ申遣す。

廿四日 雨  
出勤。

廿五日 晴雨  
預金承諾ニテ午前外出午  
後在宿。本日にて小田原  
在任預金者ハ不残承諾と  
なり、山王小八幡ニ未夕  
三名残セリ。

廿六日 晴  
出勤。午後二時帰宅。

廿七日 晴  
午前桜馬場柑橋園ニ久々  
にて行き、垣根之指図す。

廿八日 曇  
出勤。

廿九日 雨

史料蒐集ニ堀田璋左右氏  
来原之通知ニ接し、停車  
場ニ迎へ、天文ノ昔し長  
興山ノ子院正定院ニ建碑  
し今ハ松岡氏ノ邸内ニテ  
震災て倒壊シタル海保氏  
碑ヲ松岡氏ニ至り見る。

午後より行用ニテ沼津に  
至り、井沢氏ニ宿す。風  
寒し。

あけ放しまとに寄り居  
し夏過ぎてすき間の風  
もいとう此のころ

三十日 雨夜二入り甚  
タシ

井沢氏と田中弁護士方ニ  
至りしニ、昨夜帰宅セス  
今日ハ帰宅の筈と聞き、  
止を得されハ猶、一泊ト  
決し伊沢氏と帰る。

大正十四年十月

一日 晴

夜来の雨晴、あし鷹山上  
高く富士の雄姿を見る。

秋風にきはむ田面の未  
遠く

田中弁護士東京より帰宅  
せざるに、昨夜ノ強雨に  
て、程ヶ谷辺汽車不通ノ  
由ニテ、帰期不明なれハ、  
十一時発にて帰宅。

車窓より見れば富士ハ

隠見極りなし。  
おしみてかまたむら立  
て意地悪しく富士のみ  
山を覆ふ白雲

白雲のなかに一とむら  
浮雲と見しはそびゆる  
富士のいただき

二日 晴

本店二行、午後三時帰宅。

三日 晴

出勤、午後親一帰省。

四日 晴

和議申請ニ付、選任の調  
査委員来し為メ本店二行  
キ、六時半帰宅。親一午  
後四時帰京。

五日 雲

堀切新知事ニ面会ニ各重  
役ト県廳ニ至りしニ、上  
京之為メ面会セス、内務  
部長ニ面会。そも去月初  
メ来任ニテ初テ面会ナ  
リ。五時帰宅。

馬入付近にて

松林し免くる野川に秋  
ふけてまねく尾花のか  
げの浮辺る

足柄下郡畜産組合十四年  
第二回秋季競馬会ヲ去ル  
三日より、昨日迄三日間

新設ノ谷津競馬場ニ興  
行。十二万三千七百九十  
円ノ揚り高ニテ、悦者泣  
者悲喜交々。

六日 夕刻より雨

出勤二時帰宅。  
競馬中ハ桜馬場柑橋園ノ  
附近ヲ通行スル者多く、  
警戒ニ清吉を遣し置きし  
ニ、帰来食事中ノ談話ニ  
通行之或者ハ、国府津曾  
我辺ハ本年も度々通行せ  
しニ、此畑程培養之行届  
き結実の多きを不見と又  
或者ハ此畑結実整枝を見  
れハ、収益己ニ普通ノ裁  
培ニ非ず、持主ハ必ず名  
誉的二耕作するなるへし  
と賞賛するを聞き、心地  
よかりしと。

七日 雨

午前八時発にて沼津ニ至  
り田中弁護士ニ面会。打  
合を了り西光寺中村氏墓  
所を拜し五時帰宅。

途中雑詠

雨ふりていふせき窓に  
嬉しきハ晴れば絶ゆる  
瀧の白糸

八日 雨

午前六時発にて国府津ニ  
下車、徒歩小八幡本多氏  
二行。度々ノ交渉も敢  
テ異議ナキモ、好果ヲ不  
得、此雨ニと心中不平を  
生せしも、立止りて雨中  
の山水を見れハ、自ら消  
散して冷靜となる。

松並木志けりて暗き雨  
のみちしつくを傘に聞  
きつつぞゆく

本多を辞し、自動車に乗  
る。近来、国府津小田原  
間ハ、自動車数十回の往  
復有り、便を得る多し。  
青物町にて下車し出勤。  
午後帰宅す。夕刻鍛冶屋  
ノ加藤庄吉今朝取りし  
と、初たけ持来る。以前  
ハ早川辺の者秋となれ  
ハ、夕方ニ売ニ来りしも、  
山林の多ハ畑となり、自  
然にやみ三十余年ふりに  
て、夕食に汁とせしに味  
ひ甚たよし。

あしわへは 人の心も  
秋の香も薫りてうまし  
初茸のしる

彼岸花さき乱れたる高  
土手を風になひきても  
やの流るる

九日 雨

苔け青き庭に落ち散る  
梅の葉にくもりみはれ  
み 秋雨のふる

十日 雨  
出勤

十一日 雨

十二日 晴

銀行二立寄、本店会議二出席、八時半帰宅。

加奈子修学旅行二一昨夜東京出発。伊勢よりの端書来る。

雨かすつかり晴てよい御天気、うれしくて胸か一はいてす。御天気がつつくやう祈て下さいましとあり。

面白きまま

此ところ晴るるを祈るしはらくわ旅する孫を恵くめ雨神

十三日 晴

午前出勤。去る七月廿日より、四千円ノ預金者ニ打切交渉整理案之承諾を初メ有名ニ強情ニテ村内之者も別者扱と聞キ、自身に数回も面会し、猶彼ノ近親者も依頼し交渉を重る。漸々今朝承諾書得て過期を回想して、店員ト共悦ぶ。

午後より桜馬場ニ至る。今日ノ国民新聞ニ徳富蘇

峯先生ノルースウエルトと、三十七八年役ニ日本当局者の立場ニ、日本政府ノ鼻息はルースウエルトの期待以上ニ荒かつた。然も日本の輿論の鼻息は更に幾層倍荒かつた。輿論の目から見れば政府は頗る軟弱であつた。日本の当局者ハ頗る窮地に立つた。戦争中煽りに煽りたる人気ハ、今や我々身上にふりかかる事となつて来た。而して一方ルースウエルトより出過ぎるな出過ぎるなど忠告せられ、他方は国民より推し出せくと刺戟せられ鞭撻せらるるされし彼等は実に内外より圧迫せられて殆と煎餅同様とならざるを得なかつた。日本当局者の苦心も亦た買つてやらなければならぬ。彼等は自国の窮地の真相を其国民にも其輿論にも其中立国にも固より、其敵国にも出来得る限りの方便もて之を隠匿せん事をつとめた。此れら当局者の他日国民より攻撃せられたる所以で、云はば善意でハあるが、国民を欺きたる自業自得であつた。此れは或意味

に於て当局者の成功であり、又た当局者の献身的行為である云ふべきだ。国民には総てを知らしめ、敵国には総てを隠すと云ふ事は到底不可能の事、若し敵に我が真相を知らしめさらんと欲せば、勢ひ国民にも之を公けに語る事を避けねばならぬ、否な敵を威嚇するとは、勢ひ真相以外に一種の雰囲気製造する必要がある。されば善意ではあるが、敵を欺ん為めには味方を取かねばならぬ必要がある。而して其懲罰には国民の憤怒悔恨の標的とならねばならぬ。諺に為すまじきものは宮仕へといふが政治家にも亦た者般の苦悩がある。それを承知で少くとも其目的の大半を仕遂くるは政治家として一段見上げた眼識だ。

ハ止不得ル事テ、日々の苦惱も斯し有リシガ、為シ遂ケ得ぬハ震災之為テハ有たが、結局預金者関係者も震災の為メ、政府筋ノ救済ヲ得テ、禍転シ福ト為スノ道中ナリ。

十四日 晴

和議法整理委員調査之為メ小田原宮ノ下諸書類大磯支店ニ持参出張、委員之調査を受け、無事調査終る。当店之分是にて一段落となり一安心。説明につ助免たる為メ甚疲勞し六時帰宅。

十五日 晴

八時支店ニ立寄、九時発之汽車ニ乗る。郊外ニ出れハ秋景心を慈く。本店にて思之外諸事早く済たれハ半日之閑遊をと鎌倉行之電車ニ乗る。

七里浜にて

海山の秋を尋ねてとめ来れハ雲とみたれてよする日浪

鎌倉近郷ハ別荘を建列て、眼界をせばめ、藤沢以西に不及之恨あり。電車を降り八幡宮参拜。餌をまけばより来る鳩の羽をきよみ今も昔し

の秋風やふく  
汽車にて大船を廻り、四時半帰宅。

十六日 晴

午前銀行ニ出勤。午後中学校二校長ニ会談、帰途岡田氏ニ立寄る。

十七日 雨

銀行二行。

十八日 半雨

出勤。午後帰宅。

十九日 雲

九時発にて仙石原二行。村長不在にて帰宅待。食後散歩すれハ紅葉ハ未た早きも野菊など咲乱れて秋景甚たよし。  
紅葉する梢やあるを尋ねきて薫る野菊の花をこそ見る

さき続き薫る野菊の床しさにひらぬ山路を幾まかりする

廿日 晴

昨夕ハ晴渡りし空も、夜半にて降雨時々枕に聞しに、起出て見れば好晴となる。仙郷桜を立出つ、途中にて勝俣氏の来訪す



## 新刊紹介

○『関重忠日記抄—イギリス留学より日露戦争まで』

編集・解説 内田四方蔵  
発行者 奥村美恵子

二〇〇四年八月二十日発行

関重忠は小田原出身の海軍少将であり、また日露戦争における日本海海戦の写真を残したことで知られる人である。祖父の関小左衛門美章は、『関美章六十夢路』を著し、重忠の子重広は『わが家の歴史』(昭和五十四年)という冊子を残して関家の歴史を伝えている。

本書は、孫に当たる本会会員の奥村美恵子さんが、「赤茶けて虫が食い、中には紙がくっついて、開けようとすると破れて」しいう日記を、「日本の近代外交史・地域の貴重な史料なので本にされたら」という薦めを受けて刊行されたものである。内田四方蔵氏の丁寧な解説によって、関家の人々とこの日記の大意が知れるようになっている。

内容をみれば、1、明治十九年日記は英国留学日記であり、イギリス海軍大学で造船機関(造船学・化学・理学から蒸気機関等々)を学んだこと(もつとも「授業前週の通り」とある)や、他方で「珍服舞踏会」に参場した様子が描かれている。2、明

治三十三年日記は、四月の「大演習」、六月の清国の「太沽の開戦」が詳しい。3、明治三十四年日記では、十月に北白川宮妃一行の台湾訪問に随行した記録に熱が入っている。4、明治三十七年及び八年日記は日露戦争関係が大部分であるが、なかには、小田原の自宅からベストセラーの『食道楽』(村井弦齋著)が送られてきたことや、十一月には、岳父西岡澄明夫妻を招き、塔ノ沢鈴木(環翠楼)で「大愉快を尽し」、大平台の富士見亭で函嶺の紅葉を賞したことも記されている。

右のように軍人の、しかも船に乗っていた人の日記は、通常の生活感からだいぶかけ離れている。それゆえに興味があるといる人と、そうでない人とに分れるだろう。私は「台湾訪問随行記」に興味を持った。台湾を見る関重忠はどこまでも占領者としての視点であるからだ。彼の想像力は訪問旅行を迎える現地の人々の心中には及んでいない。帝国軍人の一典型をここにみる思いがした。

本書が刊行に至るまでには、宇佐美ミサ子氏・小暮紀久子氏等「関家文書研究会」による解読の努力があったという。関重忠は昭和二十年三月まで八十五歳の長寿を保った。残る大正・昭和の日記についても刊行を続けてほしい。

○『日本最古の水道「小田原早川上水」を考える』

著者 石井啓文

発行 早川上水を考える会

二〇〇四年七月十二日発行

本会会員の石井啓文さんの二冊目の著書である。内容の一部は『小田原史談』にも掲載された。ここでいう「小田原早川上水」は、板橋の旧東海道の北を平行して流れ、板橋見附の光円寺境内で暗渠に入っている水路である。

本書の前半は「小田原用水」という呼称の是非からはじまり、これが北条時代につくられた日本最古の水道であることの意味を述べ、明治の小田原宿水道および昭和八年の足柄騷擾事件を経て近代水道に生まれ変わる過程を追っている。

後半は、「早川上水」ないし「小田原早川上水」を小田原市の史跡指定とする陳情をした経緯が中心であり、終章では「早川上水公園」の設立を提案している。文中、陳情について相談を受けた岡部忠夫氏は次のような助言をしたとある。「陳情書を読む人が辟易しないように、それを受け入れやすいような表現が必要だ。理詰めでなく、相手の感情に訴えるような表現が望ましい」と考えます」。

本書の中で石井さんは、古文書を読む愉しみ・再発見する愉しみの例として、中里村の検地帳にあった「小坂新助を訊ねる旅」を記している。そして、「現在の私たちが振り返るからこそ過去が生きてくる」という。石井さんの「振り返り」は、机上にとどまらずに運動に移しているところに特色がある。

○『徐福論—いまを生きる伝説』

著者 達(つじ) 志保

発行 新興社

二〇〇四年六月十八日発行

本会会員田中豊氏の推薦による一冊。徐福は紀元前、秦の始皇帝の命令で不死の薬を求めて船出したという伝説中の有名な人物である。

著者は、徐福伝説が残る福岡県八女市と三重県熊野市を訪れ、現代の徐福伝説の周辺を読み解いていこうと試みている。そして、徐福伝説を伝承する地が増えている理由として一九七二年の日中国交正常化というごく最近の出来事を挙げて、伝説が生きていることを実感している。

末尾に「日中韓にひろがる徐福伝承地」と、詳細な「徐福文献一覧」を載せている。

(青木 良一)

## 水と緑と歴史のまち 土浦・小江戸 佐原へ行きませんか

## 1泊2日の旅

期 日 11月18日(木)～19日(金) 雨天決行

日 程 小田原駅東口(8:30)～東名～首都高速～常磐自動車道～土浦(11:50～13:30)

18日(木) (室町時代に築かれた土浦城址・櫓門が有名) (歴史的建造物が見られる通りを散策)  
 亀城公園・市立博物館・土浦まちかど蔵ほか～予科練記念館(14:00～14:40)～  
 (元小田原藩士 石川於菟次郎が眠る寺)

潮来町・長勝寺(15:40～16:10)～宿泊ホテル(16:15) 潮来ホテル TEL 0299-62-3130

(重要伝統的建造物群保存地区も散策)

19日(金) ホテル(8:40)～佐原山車会館(9:00～9:40)～伊能忠敬記念館(11:00)～

(下総国一の宮、東国の大社)

香取神社(11:15～13:00)～小田原駅東口(17:30頃)

会 費 25000円

受 付 11月5日(金) 午後2時より 伊豆箱根トラベル小田原営業所 (23-0266)  
 小田原史談会担当 勝俣 (34-3939)

多数の方のご参加をお待ちしております。なお旅行当日は健康保険証を持参下さい。

## 初詣の旅～七福神(東京港区)めぐりに出かけませんか

期 日 平成17年1月15日(土) 雨天決行

日 程 小田原駅東口(8:30)～厚木道路～東名～東京ひさくに～久国神社(布袋尊)～

てんそ天祖神社(福祿寿)～桜田神社(寿老人)～有栖川宮記念公園(12:30昼食)～

氷川神社(毘沙門天)～大法寺(大黒天)～十番稻荷神社(宝船)～熊野神社(恵比寿神)～

ほうしゅいん宝珠院(弁財天15:30)～旧芝離宮恩賜庭園(15:45～16:05)～

浜離宮恩賜庭園(16:20～17:00)～小田原駅東口(19:20頃)

会 費 6000円(含昼食代)

受 付 1月7日(金) 午後2時より 伊豆箱根トラベル小田原営業所

だいふ歩きますので、歩きやすい服装でご参加ください。

旅行当日は健康保険証を持参下さい。

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 熱海 アオキクリニック  
 飛鳥屋  
 紳士服の **アメリカヤ**  
 (株) **アルファ**  
 税理士 石原和夫事務所  
 伊勢治書店  
 株式会社 **エンドー**  
 ㊦ かまぼこ  
 ㊧ **小田原ガス**  
 小田原報徳自動車  
 かまぼこ籠 清  
 (株)カネボウ化粧品小田原工場  
 神尾食品工業 齋  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 国府津館  
 (有)小松石材店  
**COMTEC** コムテック株式会社  
 さがみ信用金庫  
 趣味のこふく さくらい  
 箱根湯本温泉 春光荘  
 雀のお宿  
 小田原 **お秀のかまぼこ**

**辰寿堂スポーツ**  
 高木整形外科医院  
 邦ほう とう ぼん 小田原城趾前 田毎  
 網元直営 **あゐる海**  
 ㊦ **そびそ二宮**  
 茶半家具株式会社  
**ちんぎら** 本店  
 角田ガクフ子店  
 東京電力(株)小田原支社  
 トーホー建物齋  
 割烹料理 **うなぎ** 鳥かつ楼  
 和菓子 菜の花  
 日本金属工業 箱根保養所  
**ルナマサ**  
 平井書店  
 (有) **古屋花店**  
 株式会社 **報徳**  
 建築金物 (株)星崎仲吉商店  
 家庭金物  
 本多時計店  
 栄町 **松坂屋**  
 学生専科 ㊦ **マルク**  
 諸星運輸グループ  
 曾我の梅干 美の政  
 塩辛・かまぼこ  
 みみづく幼稚園  
 ㊦ **オマサ** 株式会社

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円  
〇〇二〇三二六四三三三六  
小田原史談会